

今江五丁目遺跡

－宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

2000.3

志乃丘商事株式会社
石川県小松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、小松市今江町五丁目地内に所在する、今江五丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宅地造成事業に伴って、平成11年6月23日～8月9日の48日間にわたって、小松市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品整理費用は、施工主である志乃丘商事株式会社が負担した。
4. 発掘調査は、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室調査員　宮田　明が担当し、稲石純子がこれを補助した。
5. 出土品の実測、製図は、高畠　恵、山崎千春、松山容子の協力を得て、宮田が実施した。写真撮影は、遺構・遺物とも宮田が担当した。
6. 現地の作業には、以下の協力を得た。
新井清孝、太田君子、川岸吉雄、木下清江、坂本辰夫、清水悦子、千田伊三郎、西田せつ子、巻下由雄（五十音順）
7. 本書の執筆は、第1章第2節を福海貴子が、第2章第1節を宮下幸夫が、その他を宮田が担当し、編集は宮田が行った。
8. 本書に示す方位は全て真北であり、水平基準は海拔高(m)で示した。なお、図2には小松市発行2,500分の1国土地理院「今江」「今江・南」を、図3には国土地理院発行25,000分の1地形図（平成9年発行「小松」「動橋」）を使用した。
9. 本調査で出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図・写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

目 次

例 言

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 月津台地と遺跡の立地	(宮田 明) 1
第2節 月津台地の遺跡	(福海貴子) 3
第3節 遺跡周辺の旧地形と遺跡の分布	(宮田 明) 5
第2章 調査の経緯と経過	7
第1節 調査に至までの経緯	(宮下幸夫) 7
第2節 調査の概要	(宮田 明) 7
第3章 調査の成果	(宮田 明) 12
第1節 縄文時代の遺構と遺物	12
第2節 弥生時代の遺構と遺物	28
第3節 古代の遺構と遺物	28
第4節 中世の遺物	39
第4章 まとめ	(宮田 明) 39
写真図版	1 ~ 10

報告書抄録

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 月津台地と遺跡の立地

小松市南部地域は、地形的特徴において概ね3区分することができ、遺跡分布はこの地理的条件に適応するかたちで展開している。まず、白山連峰の前山地帯から続く標高20~50mの低丘陵地には、戸津・二ツ梨・郡谷金比羅山古窯跡などをはじめとした日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯群がある。また、木場・今江・柴山潟に囲まれた標高10m~20mの洪積台地には、縄文時代から中世に至る集落跡や、本古墳群を含む古墳時代後期の古墳・集落跡が見られる。そして残る地域は、加賀三湖の各々をとりまいて形成している潟埋積平野で、水田地帯となっている。

月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋め立て、農地開発等によって、現在ではほ

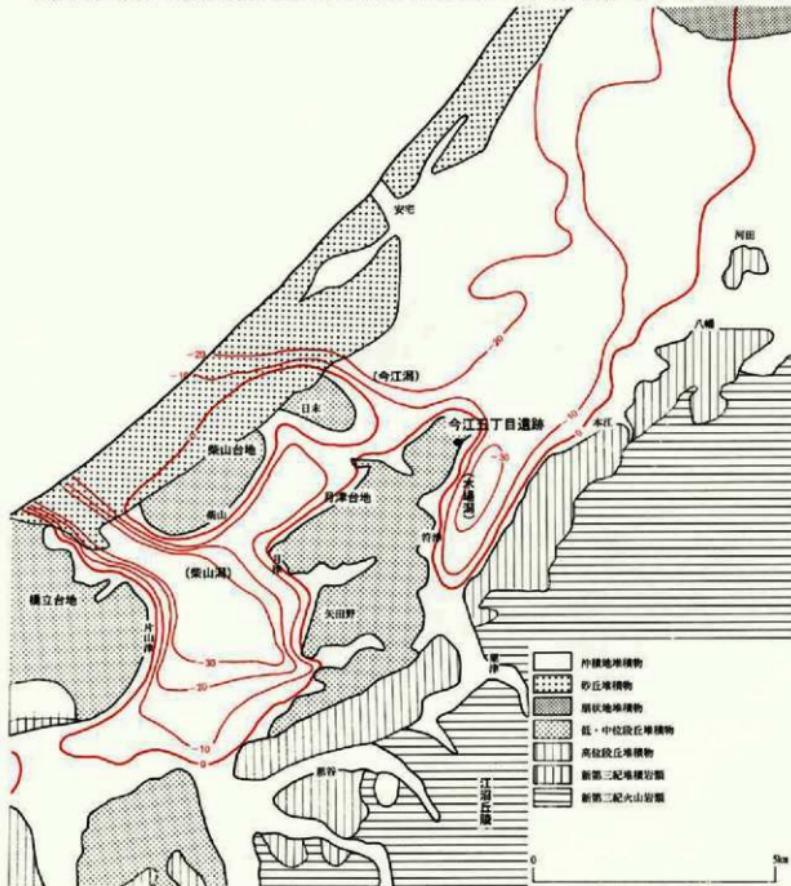


図1 月津台地周辺の地質と沖積層基底の地形 (S=1/100,000)

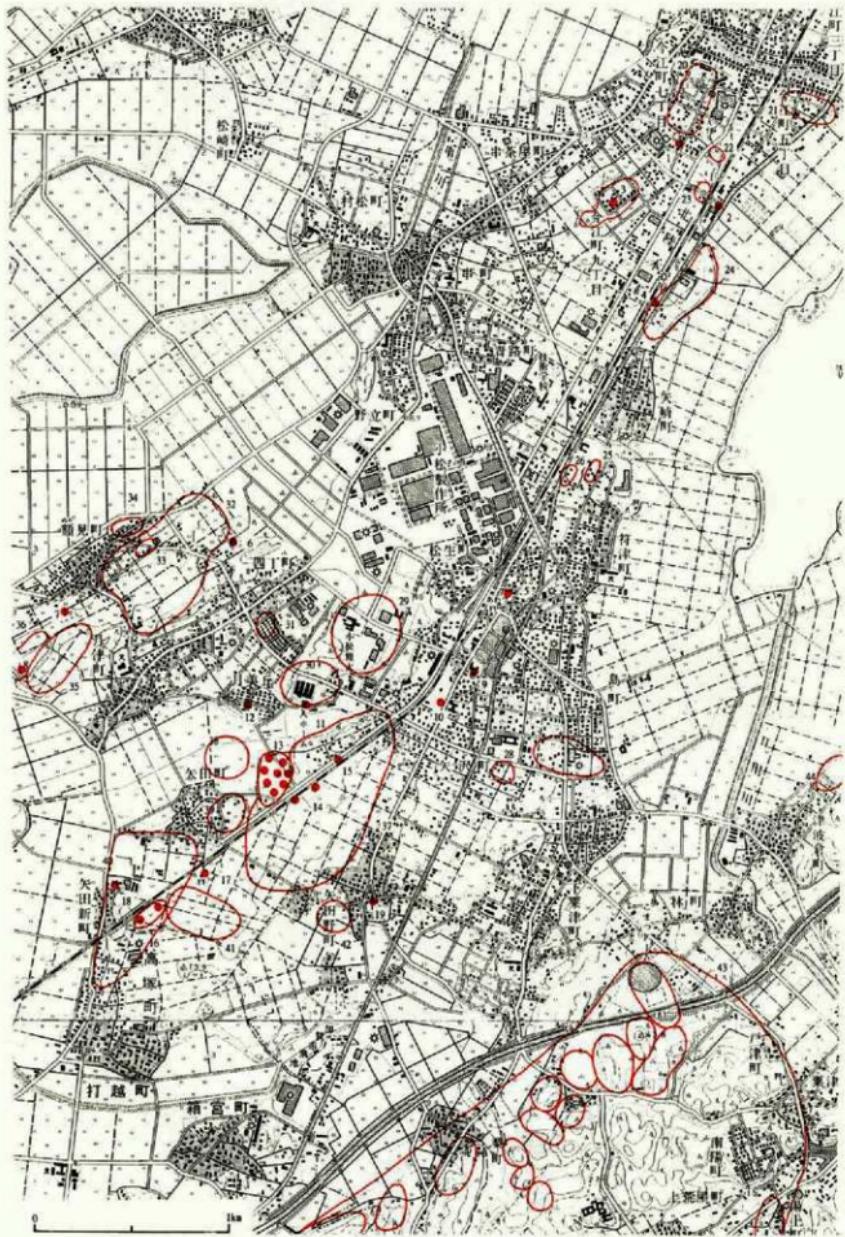


図2 周辺の道路分布 ($S = 1/25,000$)

遺跡名	時代	所在地
1 御幸塚古墳	古墳	今江町
2 土百古墳	古墳	今江町
3 狐山古墳	古墳	今江町
4 矢崎B古墳	古墳	矢崎町
5 笠津石山古墳	古墳	笠津町
6 白のぼぞ古墳	古墳	串町
7 佐衛門塚古墳	古墳	額見町
8 茶臼山古墳	古墳	月津町
9 菓輪塚古墳	古墳	鳥町
10 矢田野エジリ古墳	古墳	矢田野町
11 念仏塚古墳	古墳	月美丘町
12 念仏林古墳	古墳	月津町
13 借屋古墳群	古墳	矢田町
14 矢田野古墳群	古墳	矢田野町
15 百人塚古墳	古墳	矢田町
16 無名古墳群	古墳	矢田町
17 狐森塚古墳	古墳	矢田町
18 矢田新丸山古墳	古墳	矢田新町
19 中村古墳	古墳	矢田新町
20 御幸塚城跡	中世	今江町
21 五郎座貝塚	縄文	今江町
22 今江五丁目遺跡	縄文・奈良	今江町
23 上百遺跡	縄文	今江町
24 薬師遺跡	弥生・奈良	今江町
25 笠津A遺跡	縄文	笠津町
26 笠津B遺跡	縄文	笠津町
27 島遺跡	古墳～奈良	島町
28 島B遺跡	奈良～平安	島町
29 念仏林遺跡	縄文～古墳	四丁町
30 念仏林南遺跡	縄文・弥生・古墳	月津町
31 月津新遺跡	縄文	四丁町
32 額見町遺跡	縄文～中世	額見町
33 額見神社前A遺跡	縄文	額見町
34 額見神社前B遺跡	弥生～古墳	額見町
35 茶臼山A遺跡	縄文	月津町
36 茶臼山祭祀遺跡	奈良	月津町
37 矢田野遺跡	古墳	矢田野町
38 矢田A遺跡	縄文	矢田町
39 矢田B遺跡	古墳	矢田町
40 矢田新遺跡	奈良	矢田新町
41 刀何理遺跡	古墳	矢田野町
42 矢田野神社前遺跡	平安	矢田野町
43 南加賀古窯跡・製鐵跡群	古墳～中世	林野・戸津町・二ツ梨町
44 大谷山貝塚	縄文	津波倉町

表1 遺跡地名表

とんど旧地形の把握が困難な状況にある。このような状況を踏まえて、地質学的な視点から月津台地にスポットを当ててみたい。図2は、柏野義夫編著『石川県地質誌』(石川県、1994年)に掲載された第四紀地質図に基づいて作成した月津台地周辺の地質と沖積層基底部の地形である。

月津台地・柴山台地・橋立台地は、後期更新世(約15万～10万年前)に形成された中位段丘であり、陸化した後の開析によってそれぞれ分断された。月津台地は南側で江沼丘陵と接し、東側は南北に大きな開析を受けて丘陵部と分断され、中央部から西側にかけて東西に開析を受けている。

約6千年前の縄文時代前期の最大海進時には、月津台地は江沼丘陵から北に突き出した半島となり、周囲は、柴山台地・橋立台地・江沼丘陵に囲まれた入江の状態であったと考えられる。柴山台地は、この当時は離島となっていたらしい。これら三つの中位段丘のうち、月津台地が最も標高が低く、最も開析作用の小さい平坦な地形であったため、開発の手が入りやすく、その影響が最も大きかったと言える。しかし、視点を変えれば、人々の活動の舞台となり易い立地条件を備えているとも言えるのである。

第2節 月津台地の遺跡

この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡(29)出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場潟東南岸丘陵線の大谷山貝塚(44)など、貝塚を伴った集落が、潟に面して営まれているものの、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、念仏林南遺跡(30)、茶臼山A遺跡(35)のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合されるかたちで採取されている。

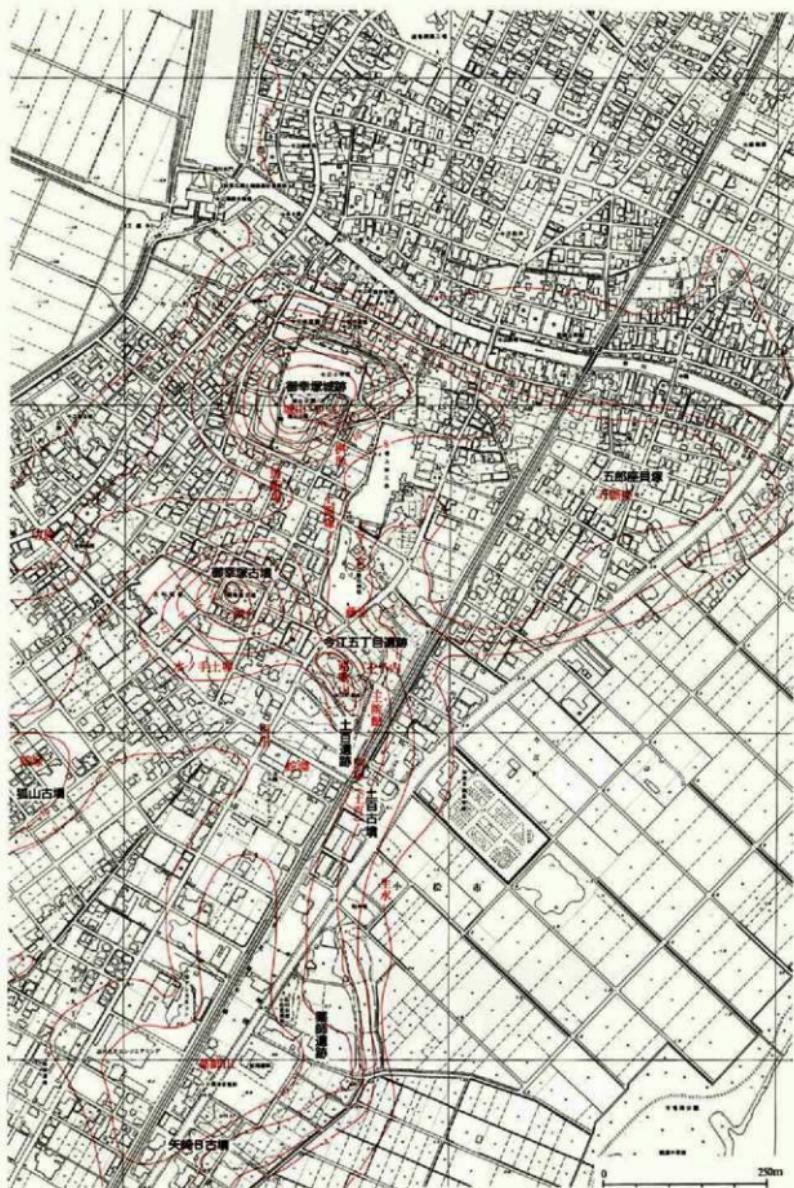


図3 御幸野台地の旧地形 (S=1/7,500)

後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵上に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末～古墳時代初頭の月影式に属するもので、念仏林南遺跡などでは良好な竪穴住居跡を検出している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな開析谷の周間に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡(37)・矢田B遺跡(39)・刀何理遺跡(41)などが群集し、概期の古墳分布との重なりをみせている。昭和59・60年に調査された念仏林南遺跡では、竪穴住居21軒、掘立柱建物跡が17棟検出されている。内容的には、際だった建物や遺物ではなく、さほど広くない舌状の台地を地形単位で居住地として占有した、村落形態の一典型例といえることができる。本遺跡は、先に触れたように、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。飛鳥・奈良時代になると木場潟西岸台地上の薬師遺跡(24)・島遺跡(27)、柴山潟に面した矢田新遺跡(40)、中世までの複合遺跡である額見町遺跡(32)等の存在が知られている。特筆すべきこととして、額見町遺跡・額見町西遺跡では7世紀全般にわたって、L字形カマドをもつ竪穴住居、いわゆるオンドル状遺構や、鉄鑄造の鍛冶炉が検出されている。これらのことから額見町遺跡が渡来系技術者の存在を伺わせる重要な遺跡であるといえよう。

江沼丘陵に展開する生産遺跡として、南加賀古窯跡群は(43)は、須恵器・埴輪・土師器・壺器系窯跡を総称したもので、県内最大の規模をもつ。その数は、現在確認されているもので、須恵器窯跡195基、土師器窯跡約60基、壺器系中世陶器窯跡(加賀古窯・加賀焼)39基を数える。中世陶への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連続と生産を行っている。須恵器生産の開始は、5世紀末ないし6世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山(殿様池)古窯跡が含まれており、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。

第3節 遺跡周辺の旧地形と遺跡の分布

図3は、今江五丁目遺跡周辺の現況の地図と、地元住民の話などから推定される旧地形の概略を復元したものである。センターは2m間隔であり、現況の地図のセンターは、旧状をとどめていると見なされる部分はなるべく拾っている。

この付近の地形は、標高約21mを測る「城山」と「三湖台(御幸塚)」を中心として、なだらかな地形が続く。月津台地の北東部に位置し、地元ではこのあたりを特に「御幸野台地」と呼ぶ。具体的には「狐塚」と「薬師山」以北を指すらしい。「城山」の東には「五郎座」台地が舌状に延び、「三湖台」の南西には「狐塚」、南東には「連歌山」、ここからさらに南に「薬師山」が、それぞれ尾根続きに連なり、月津台地に連絡している。「三湖台」と「薬師山」の間から、大きな鞍部が南北方向に延びて、現在の串町に至る。図中に「蛇淵」と記したあたりは、かつて湧水のあったところというが、具体的な位置は特定できない。また、木場潟の畔にも「生水」という湧水があった。

前節と一部重複するが、今江五丁目遺跡周辺の遺跡を特に取り上げてみよう。

「五郎座」は、かつては標高7～8mを測る舌状の台地であったというが、現在は削平されて宅地化している。「五郎座」と「連歌山」の間は鞍部になっており、かつてはここまで木場潟が湾入していたという。「五郎座」には縄文時代中～後期の五郎座貝塚が所在し、「連歌山」の麓には、南側に土百(胴百)遺跡、北側に今江五丁目遺跡が所在する。五郎座貝塚は、縄文時代中期以降、弥生時代に

至る遺物の出土が伝えられ、石鎌・石匙・磨製石斧・石錘などの生産用具のほか、石棒・石剣などの呪具の類が出土している。土百遺跡は、縄文時代中期の土器、打製石斧の出土が伝えられる。今江五丁目遺跡も、縄文時代中期と後期を主体とする遺跡である。

五郎座貝塚は、国道8号線の建設や付近の水田の乾田化の際に「五郎座」の土採取が行われたときに遺物の出土が確認された遺跡であり、この間、昭和34年から5年間にわたって上記の遺物が採集されたといい、それ以前には、遺跡の存在は知られていなかった。しかしながら、それ以前にも、この付近では「井戸を掘ると貝殻が出てくる」ということが、住民の間には知られていたという。このような事情から、発掘調査がされないまま、発見と同時に消滅してしまった五郎座貝塚だが、遺物が採集された範囲やや狭いながら、遺物の組成などを勘案すると、縄文時代の御幸野台地における生業活動の拠点的な集落遺跡であった可能性が高い。

弥生時代の遺物の出土が伝えられるのは五郎座貝塚と、「薬師山」に所在する薬師遺跡がある。五郎座貝塚からは蛤壳石斧、薬師遺跡からは弥生土器の出土が伝えられる。

前節でも述べたように、月津台地は後期古墳の集中地帯であり、その北東部を占める御幸野台地も例外ではない。「三湖台」には御幸塚古墳、「狐塚」には狐山古墳、「薬師山」には矢崎B古墳が造営された。このほかにも、御幸塚古墳の北東に隣接して「女郎塚」、上述の土百遺跡の付近には「胴塚」、「頸塚」という2基の円墳があったといわれる。「女郎塚」の所在地は、現在の帝人加工糸株式会社の構内に比定され、地元の人の話では、かつて発掘調査が行われていたと言うが、これに関する記録は、管見には触れていない。「頸塚」は位置を示す記録がなく、「胴塚」は胴百（土百）という地名として残っており、土百古墳がそれに当たる。このほかには、「五郎座」の南側、木場潟に面して4基の横穴墓があったという。

古代の集落として、今江五丁目遺跡と薬師遺跡があげられる。いずれも7世紀代～8世紀前葉ごろを中心に當まれた集落である。

中世には、「城山」に御幸塚城が築かれる。文献上では、1445年の富樫泰高の築城といわれる。規模は、本丸が東西100m・南北45m、北の二ノ丸が東西218m・南北75m、南の二ノ丸が東西65m・南北87m、西の二ノ丸が東西65m・南北45mなどとなっている。また、本丸の南東隅には櫓が建っていた。さらに、「三湖台」の南側には「水ノ手土塹」と呼ばれる外堀が掘られ、その北側には、「搔上」と呼ばれる土累が築かれた。「城山」に現存するのは本丸跡と北の二ノ丸跡であり、それぞれ城山公園、今江小学校になっている。そのほかは削平されて、完全に消滅してしまっている。図3にある、「樹形」「馬転場」「馬出」という地名は御幸塚城にゆかりのある地名であり、「切通」は、藩政期初期に北国街道を整備したときに土壁を切ったことに由来する地名という。

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至るまでの経緯

市内今江町在住の大井貞夫氏は、氏の所有する今江町5丁目787番地（外10筆）において宅地分譲事業を計画し、平成9年8月5日付けで埋蔵文化財の取り扱いについての協議書を提出された。

小松市教育委員会は当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地とはなっていないが、周知の御幸塚古墳や土百遺跡、今江横穴に隣接しているので埋蔵文化財が存在する可能性があり、事前に確認の試掘調査が必要との回答を同8月8日に行った。

同8月18日付けで大井氏より埋蔵文化財試掘調査の実施の依頼があり、同30日に埋蔵文化財試掘調査を実施した。

当該地は南西側の台地部分とその他の低地部分に分かれていて、低地部分は旧木場湯の埋跡と判断され、埋蔵文化財がの存在しないものと判断より、開発面積6,012m²のうち約2,000m²を対象に2本の試掘溝を設定し、重機により掘り下げ、埋蔵文化財の存在確認を行った。その結果、2本のいずれの試掘溝よりも遺構・遺物が確認された。さらに1本より低地への落ち込みも確認され、落ち込みラインが想定された。

よって、事業予定地の南西側の台地部分には埋蔵文化財の存在が確認され、平成3年度の分布調査において埋蔵文化財が確認された地区より連なっているものと判断された。

上記試掘調査の結果を事業者に平成9年9月26日付けで報告した。

平成10年になり、事業は大井氏より市内桜木町に所在する志乃丘商事株式会社に移り、市の開発事前審査会を経て、同社より平成10年11月20日に埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。工事計画は2期に分かれていて、1期工事は低地部分の埋蔵文化財が存在しない区域であったため、これを工事立ち会い及び慎重工事を条件に了承し、2期工事部分は発掘調査が必要との回答を同11月30日に行った。

その後事業者と市教育委員会は協議を行い、街区部分は地下の埋蔵文化財に影響を及ぼさないよう盛土工事とし、発掘調査は区画道路部分のみとし、事業者負担で平成11年度に行うことになった。

平成11年4月1日、事業者より教育長に埋蔵文化財発掘調査の実施についての依頼書が提出された。同4月23日、事業者より文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘の届出が文化庁長官宛に提出され、それに対して同5月17日付けで石川県教育委員会より事業者に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がなされた。

4月1日の発掘調査依頼に対して、市教育委員会は発掘調査を同6月23日より8月21日の予定で実施する旨を6月23日に回答した。

同日、市教育委員会は文化庁長官に文化財保護法第98条2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

発掘調査は、平成11年6月23日より同8月9日まで行った。

第2節 発掘調査の概要

発掘調査に先立ち、事業者から予定地への水道の引込管の埋設工事を行う旨の知らせがあり、5月24日、発掘調査予定地のうち道路から幅6m、約79m²の部分については工事立ち会いで対応すること

とした。同日、現地で礫の集中箇所（SK01）を検出し、これを緊急に調査した。

6月14日、残りの330m²の部分の表土除去を実施した。現地の土質は水捌けが良いためか、土壤化が著しく、遺構の平面精査は困難と判断、試掘の段階で遺物包含層とした部分をすべて重機によって掘削し、遺物の分布状況を確認した。結果的に、遺構の上部の大半を削平する事となったが、その後の断面精査の結果、モグラやミミズ等の土壤生物の影響や耕作等の擾拌が著しいことが判明し、断面での遺構面も確認できない状況であった。また、調査区の南半は、風倒木による擾拌が著しく、縄文時代の遺構はその間隙を縫ってわずかに検出される程度であり、殆どは、風倒木痕の上に掘り込まれた古代の遺構であった。

このような状況から遺構の検出・掘り下げは困難を極め、好天に恵まれたことが、水捌けの良い土壤のため乾燥がはやく、皮肉にも遺構の検出をさらに困難なものとした。このため、遺構の検出と掘り下げをほぼ同時にい、調査区を北から南へ、さらに南から北へ再検出するという方法を探り、掘建柱建物の検討などが現地では不完全なものとなった。

グリッドの設定は、工事の設計図面の座標原点（X=100、Y=100）をグリッド原点（X=0、Y=0）とし、南北にX軸、東西にY軸を設定し、方位はこのグリッドにより真北で示すこととした。このため、調査区の全体図は変則的なレイアウトになっている。グリッドは5m間隔で区切り、原点から北から南へX=0、1、2…n、西から東へY=0、1、2…nと定めた。

6月23日、この日より作業員を動員し、調査区の壁面の精査を開始し、基本層序を確認し、併せて平面精査も行う。表土除去の段階で露出していた礫の集中は、同28日までに、集石遺構であることが確認された。

7月6日、当初隅丸方形プランと思われたSI01が、いびつな形に掘り上がり、柱穴と思われるピットも、結局ならばず。この段階で、SB09の関連する施設と考える。

7月7日、土坑の重なりと考えていたX03Y06グリッドで、SI02を検出。土坑に見えたところは埋め戻し土と思われた。周囲のピットを平面図に記録した後、床面を確認。このときに地床炉を検出。

7月13日までに、X08Y08グリッドにおいて、調査区南壁のサブトレーンチ柱に検出した焼土が竈と判明、竪穴のプランと竈の調査を行う（SI03）。しかし、検出の段階で床面が露出し、焼土も竈の床部分であった。辛うじて、煙出しらしき凹みを検出。同日、調査区の南半で地山が検出されないため、竪穴建物の存在の可能性を想定し、サブトレーンチを入れるが、すべて、風倒木による擾乱と判明。

7月16日、SI02と重複してSB01・SB02、その南側にSB03・SB04を確認した。

7月22日、X05Y07グリッドにおいて出土した爪形文土器の周辺にSK19を検出、前期の土器片もここから出土する。SI02が残り3割程度で完掘となるため、10m²程度を拡張した。

7月28日、調査区南半でSB05・SB06を確認した。

7月29日、遺構平面図の最終確認の後、調査区の南壁と北壁のセクション図を作成。8月9日までにすべての作業を終了した。

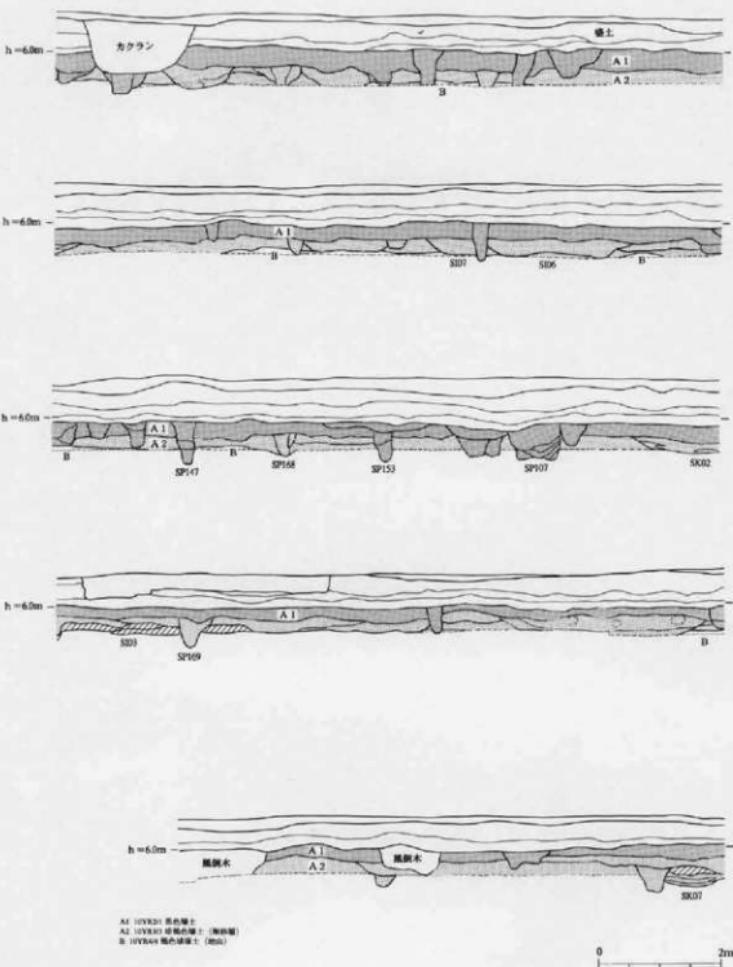


図4 調査区南壁土層断面図 (S=1/80)

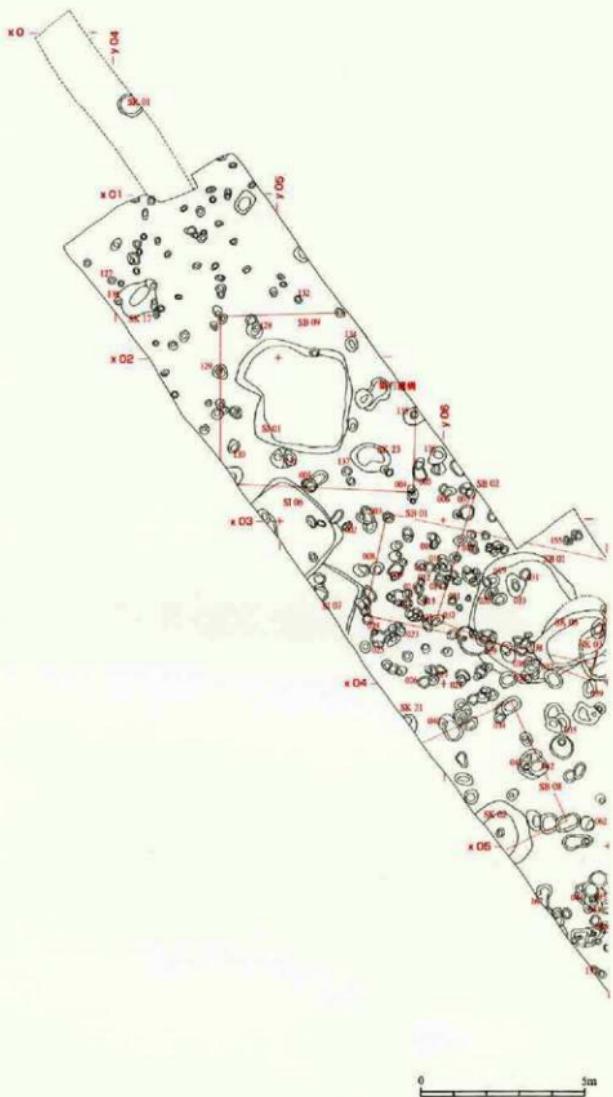


図5-1 調査区全体図(1) ($S = 1/150$)

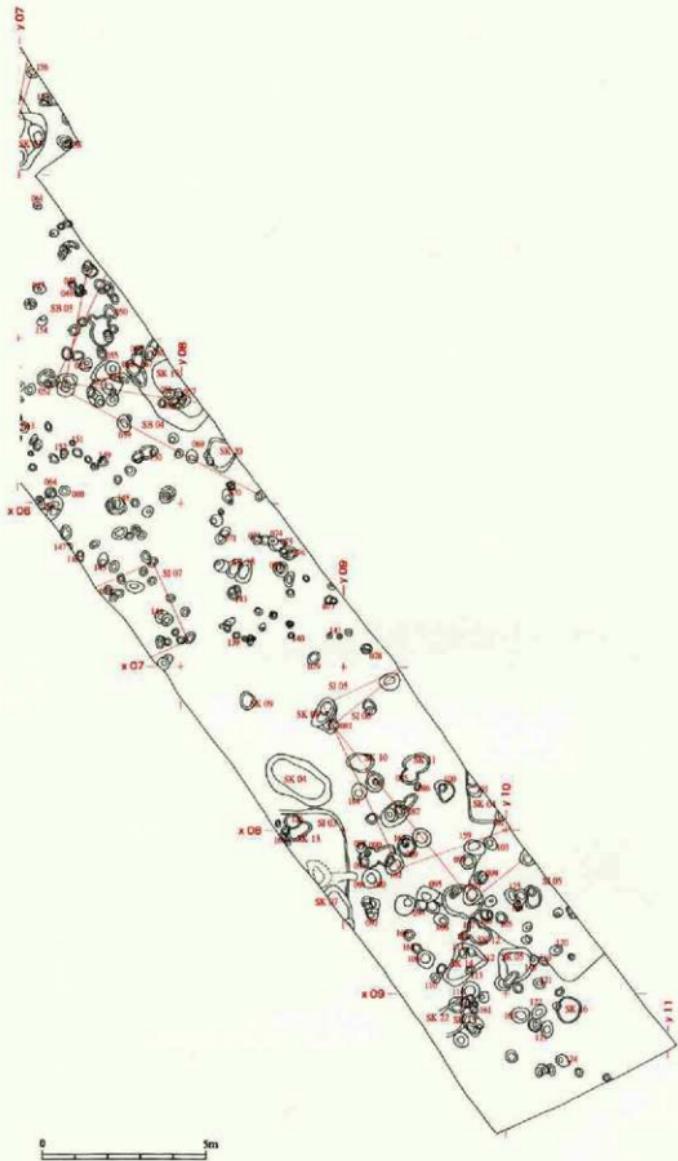


図 5-2 調査区全体図(2) ($S = 1/150$)

第3章 調査の成果

第1節 繩文時代の遺構と遺物

1. 遺構(図6・7)

S102

円形プランの竪穴建物であり、中央に地床炉がある。直径は350～410cm、床面のレベルはh=5.1m。床は、B層の埴土塊を敷き詰めるが、炉の周りだけ空けてあり、炉は床より凹んでいる。柱穴は検出されず、竪穴の外側にあったと思われるが、確認には至らなかった。竪穴内からは、中期前葉から後期中葉までの遺物が出土しているが、いずれも覆土中であり、建物の廃絶後のものであろう。長らく凹地のまま放置されていたが、最終的には埋め戻されたと思われる。覆土の中央部に有機物の富んだ黒褐色土の層(3・4層)がある。

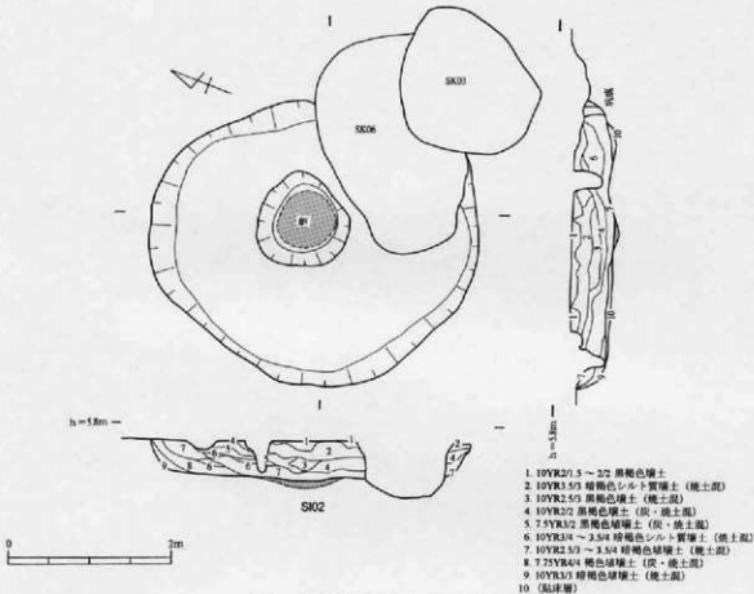


図6 繩文時代の竪穴建物 (S=1/60)

集石遺構

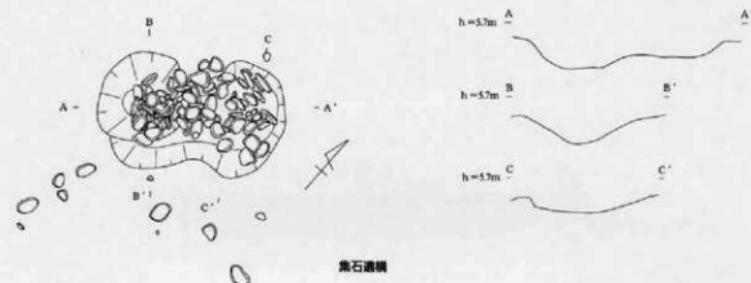
土坑に81個の砾が納められていた。当初、石錘の素材を集めたものと考えたが、当遺跡で出土した砾石錘とは、大部分のものがサイズも岩質も違う（27頁、表3参照）。別の目的を考えた方がよいだろう。これらの砾に混じって後期の土器が出土した。

SK 19

平面のプランは不確定であり、セクションで見ても、覆土は明確ではない。有機物の浸透などの影響で、二次的に生成された層を掘った可能性が高い。前期の土器や砾石錘が上面より出土し、これらの分布と、土坑の下底としたレベルとの差は一定である。草創期の土器もこの周辺で出土しているが、土坑の内外に分布し、土坑との連関性は薄い。

SK 22

上面より前期と中期の土器が出土。SK 19と同様、土壤化の作用で覆土の状態は不明であり、やはり同様に遺物の出土レベルと、土坑の下底としたレベルは差が一定である。



集石遺構

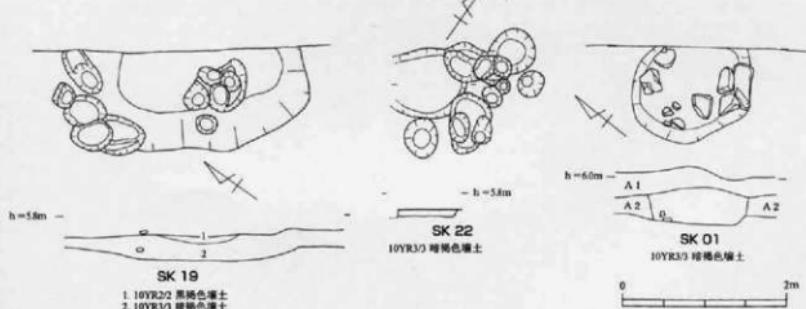


図7 繩文時代の土坑等 (S=1/60)

2. 遺物(図8～19)

草創期の土器(図8の1・2)

二例とも爪形文土器である。図示したのは二片のみだが、X05Y07・08グリッドおよびSK19からは、個体識別で少なくとも3個体分の爪形文土器が出土している。ほかの場所からの出土はない。以下にも述べる図8の9のような爪形文とは明らかに異なり、前期の資料に伴って出土しているのは、二次的な要因を考えるのが妥当だろう。

前期の土器(図8の3～9・図9の19・図11の31)

3は、直前段反燃りの右燃り複節縄文を施し、口唇部に刺突文を施す深鉢であり、同一個体である。4～7・31は、原体の先端の折り返し部分を強く燃ったいわゆるループ文を施した深鉢である。8は口縁部に半截竹管を用いて刺突を施し、脇部に右燃り単節縄文を施す深鉢である。いずれも東日本系の前期前～中葉の土器であろう。

9は、口縁部に爪形文を施す、西日本系の前期前葉の深鉢である。19は、結束羽状縄文を施す。東日本系の前期前葉の深鉢である。

中期の土器(図9の10～12・図11の32)

10・11・32は、全面に単節縄文を施す粗製深鉢である。原体は、10が左燃り、ほかは右燃りである。新崎式～上山田古式に比定される。

12は、古府式に比定される精製深鉢である。

後・晩期の土器(図9の13～18・20～図10の30・図11の33・34)

13は、0段多条の右燃り単節縄文を施し、刻みは、左手親指の爪によるものである。気屋式に比定される。14は、加曾利B1式に比定される精製深鉢である。

16～18は、沈線の区画内に縄文を充填し、縄文は原体を持ち替えて羽状とする、精製深鉢である。20・21は、沈線の区画内に二枚貝の腹縁を押し引いた「擬縄文」を施す精製深鉢である。22は口縁部を刺突帶で装飾する精製深鉢であり、刺突帶を半肉彫り状に浮き上がらせるところに特徴がある。23～25は、注口土器であり、装飾は16～18と共通する。19・34は、羽状縄文を施した粗製深鉢であり、19は結束羽状、34は原体を持ち替えての羽状縄文である。26は、沈線帯を円弧で区切って単位化する装飾をする精製深鉢である。28は、左寄りの単節縄文を施す粗製深鉢であり、肥厚した口唇部を内外から交互に押捺して波状にうねらせている。33は、右巻きの絡条体圧痕を施す粗製深鉢であり、内外面を丁寧に研磨して仕上げている。27は、二枚貝条痕を施す粗製深鉢であるが、内外面とも丁寧に研磨して仕上げている。これらは、酒見式に比定される。

29は、沈線帯内に列点文を施す精製深鉢であり、その特徴から、御經塚式に比定される。30は、該期にみられる口唇部を装飾する浅鉢である。

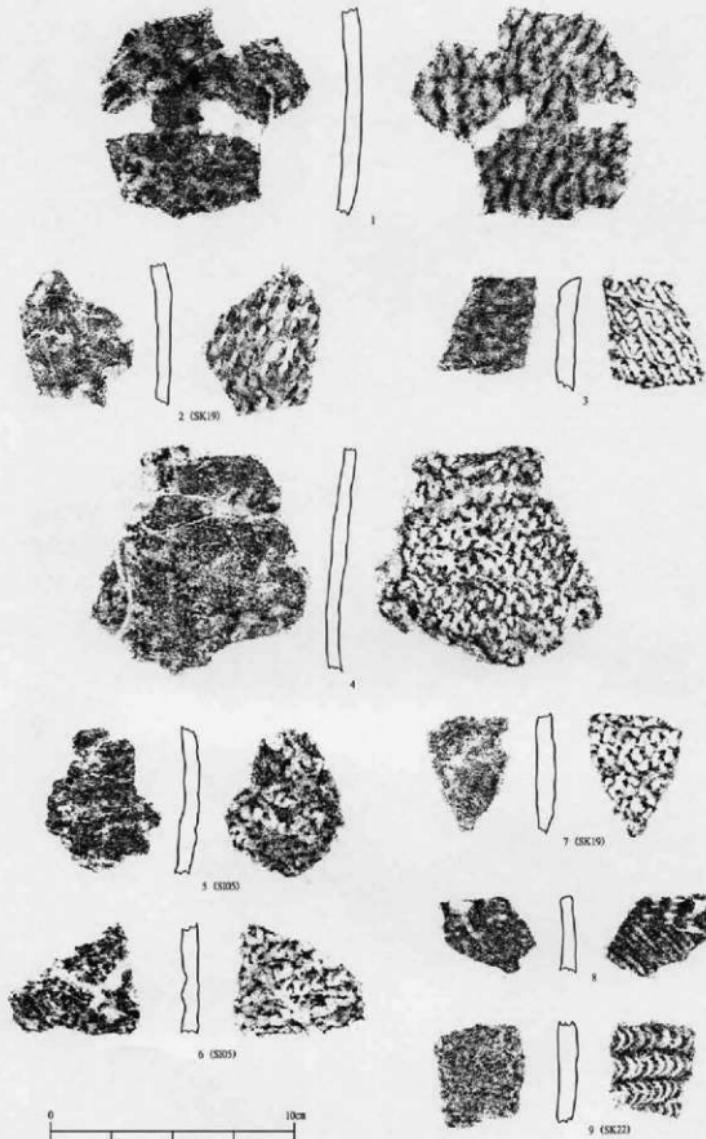


図8 繩文土器（草創期・前期）（S=1/2）

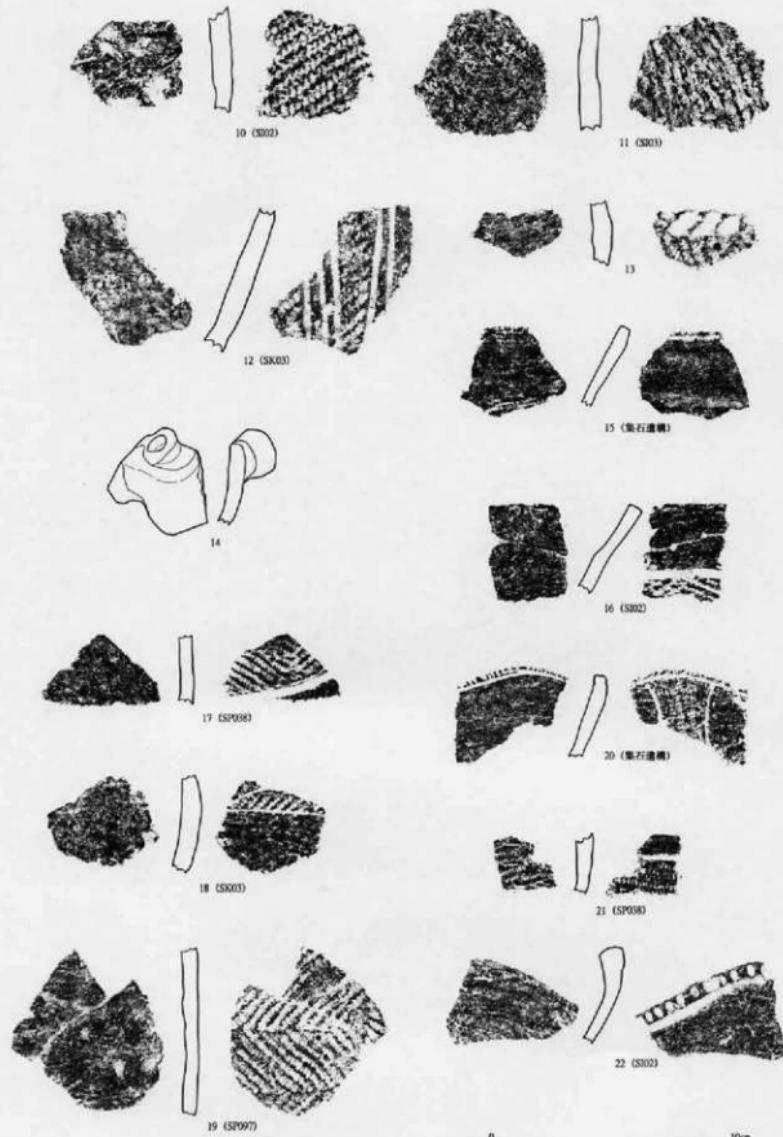
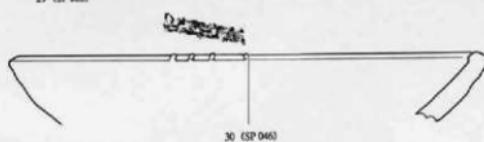
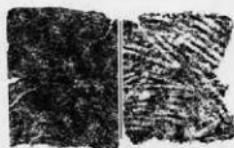
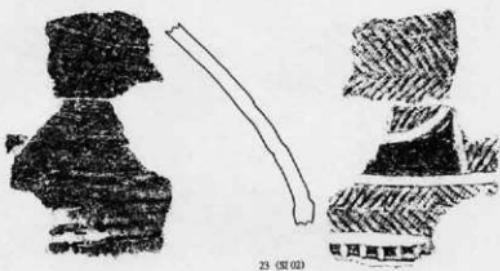


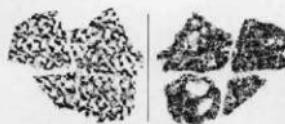
図9 純文土器（中期・後期）（S=1/2）

0 10cm



0 10cm

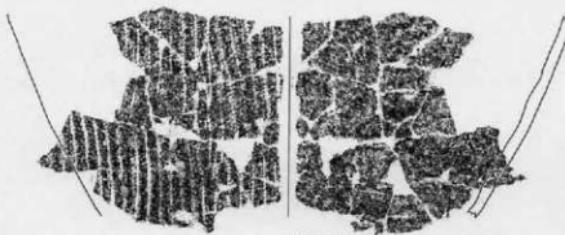
図10 繩文土器（後期・晩期） (S=1/2)



31 (SK 19)



32 (SK 22)



33 (集石遺構)



34

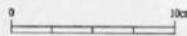


図11 條文土器（前期・中期・後期）（S=1/3）

石 錐 (図12の1)

輝石安山岩製。形態的には横型である。横長の素材剥片の左右辺の手前（打面側）を加工してツマミを作っている。

磨製石斧 (図12の2)

流紋岩製。形態的には定角式である。基部を欠損。

石 鐸 (図12の3)

黒曜岩製。形態的には平基無茎式である。

石 鍤 (図13の4～図17の62)

すべて礫の両端を打ち欠いた、いわゆる礫石鍤である。打欠には、敲打を繰り返して凹ませるもの、剥離させて凹みをつけるもの、の二つの型がある。両者の違いは、素材の岩質によって生じるものであろう。37は磨石に転用され、58～62は磨石を転用している。

磨石・敲打器 (図15の37・図17の58～図18の71)

磨石は、石鍤や敲打器と併用あるいは転用されるケースがままあるため、単独の器種としては数えにくい。58～62・65・70・71は磨石として使用された摩滅痕を残し、58～69は敲打器として使用された潰痕を残す。挿図や表2では磨石類として一括した。

石皿・砥石 (図19の72～74)

72は、両面に摩滅が認められ、多孔質な石材であることもあり、石皿と考えた。73は台石となる可能性もあるが、摩滅痕のみ認められ、74は使用面に擦痕が著しいことから、それぞれ砥石と考えた。

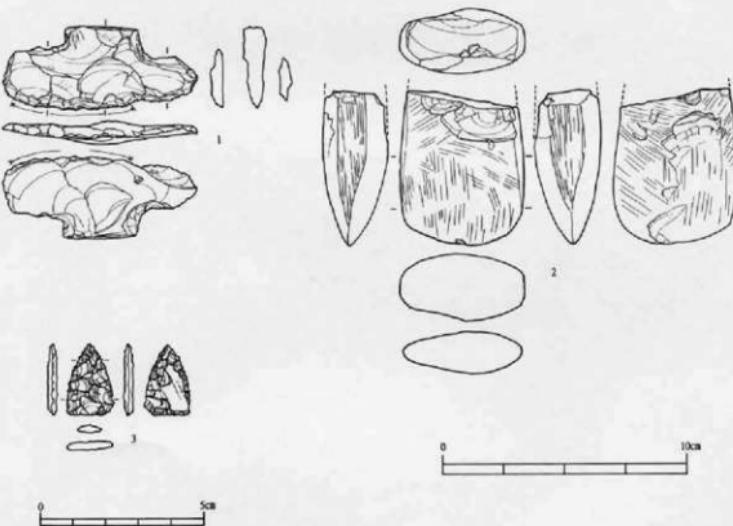


図12 石鍤・磨製石斧 (S=1/2), 石鑓 (S=2/3)

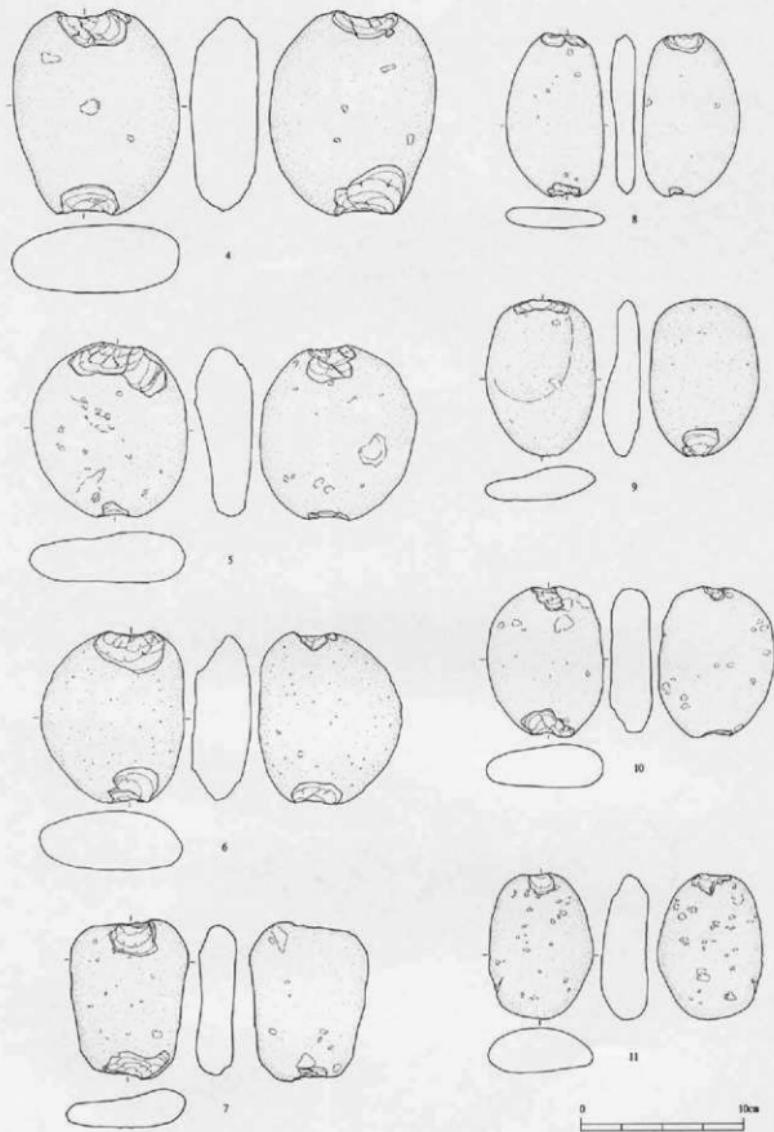


図13 石鍬 ($S = 1/3$)

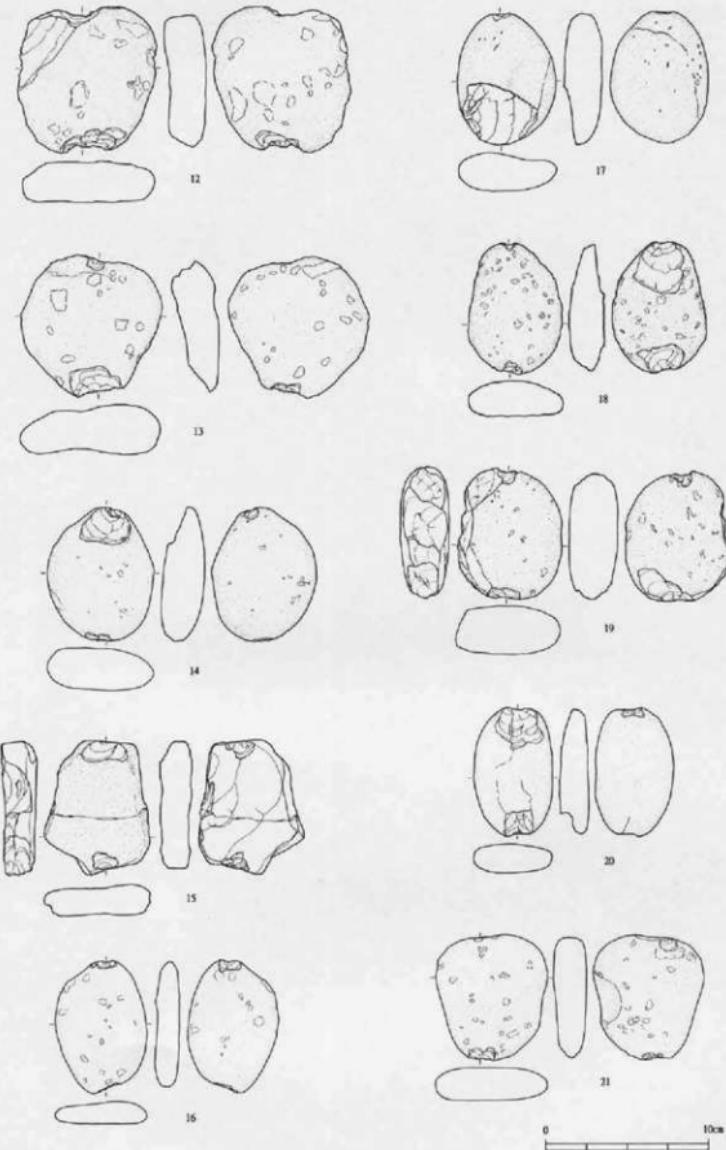


図14 石鍤 ($S=1/3$)

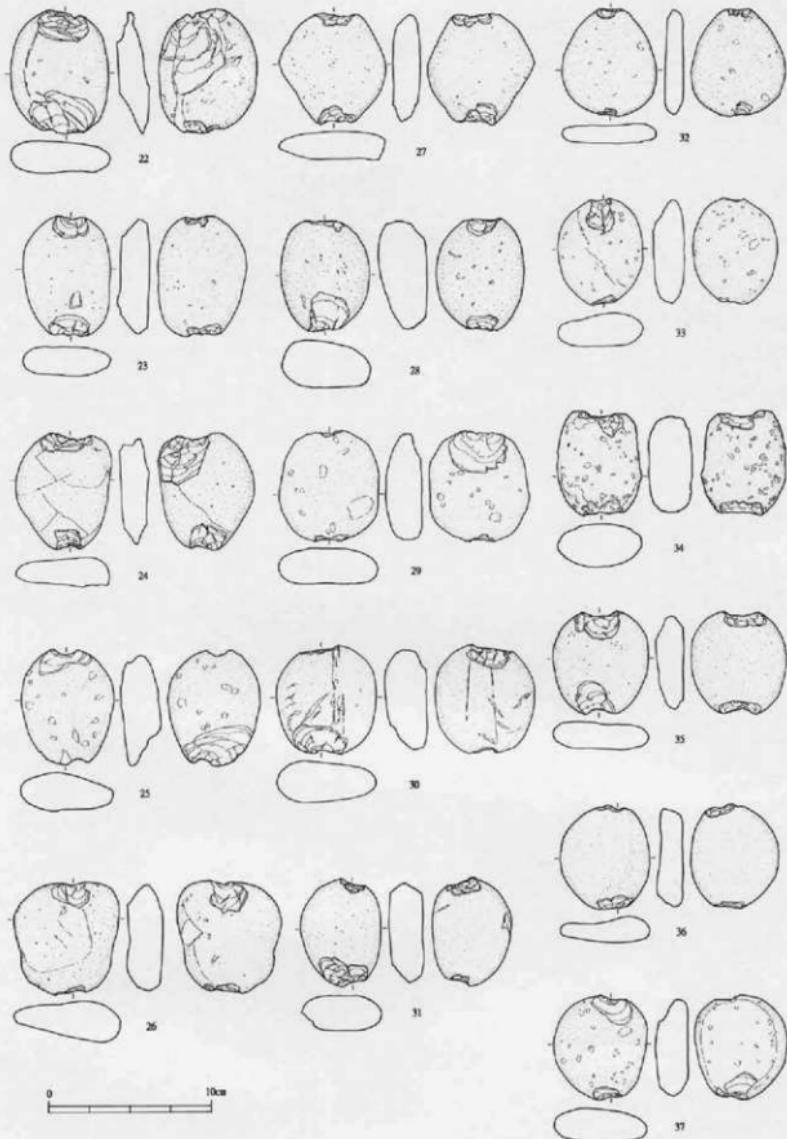


圖15 石鏟 ($S = 1/3$)

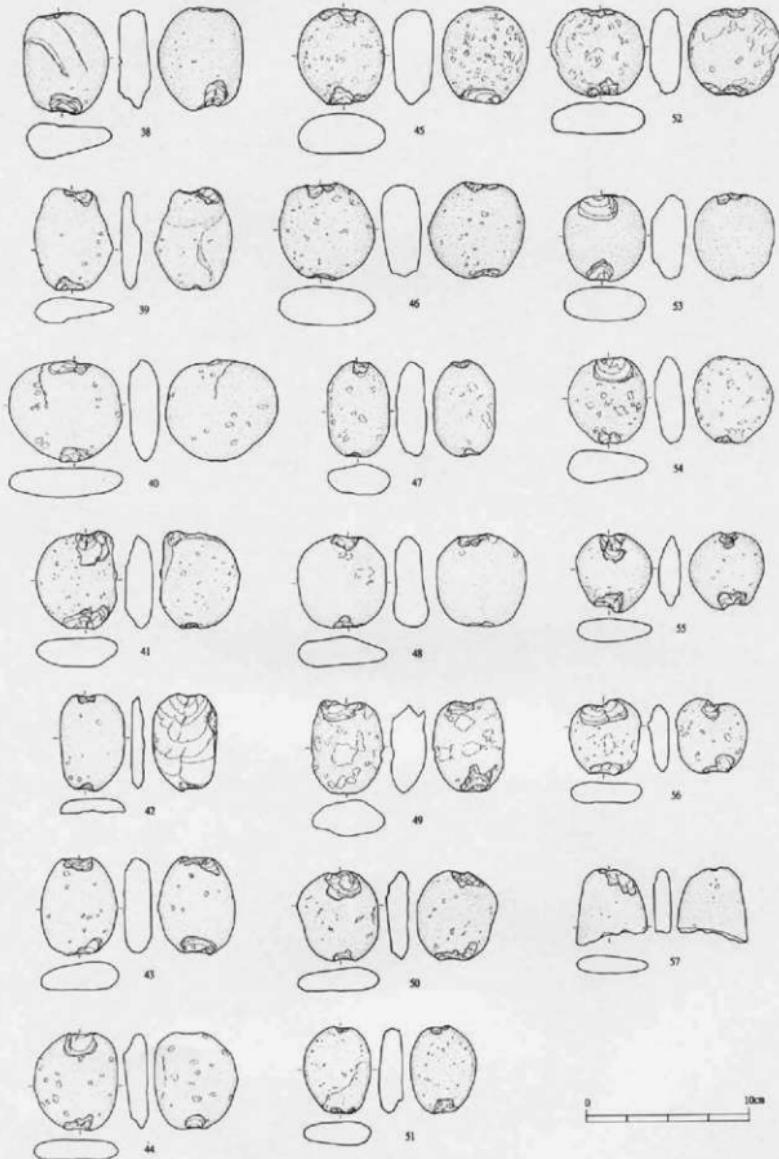


图16 石锤 (S = 1/3)

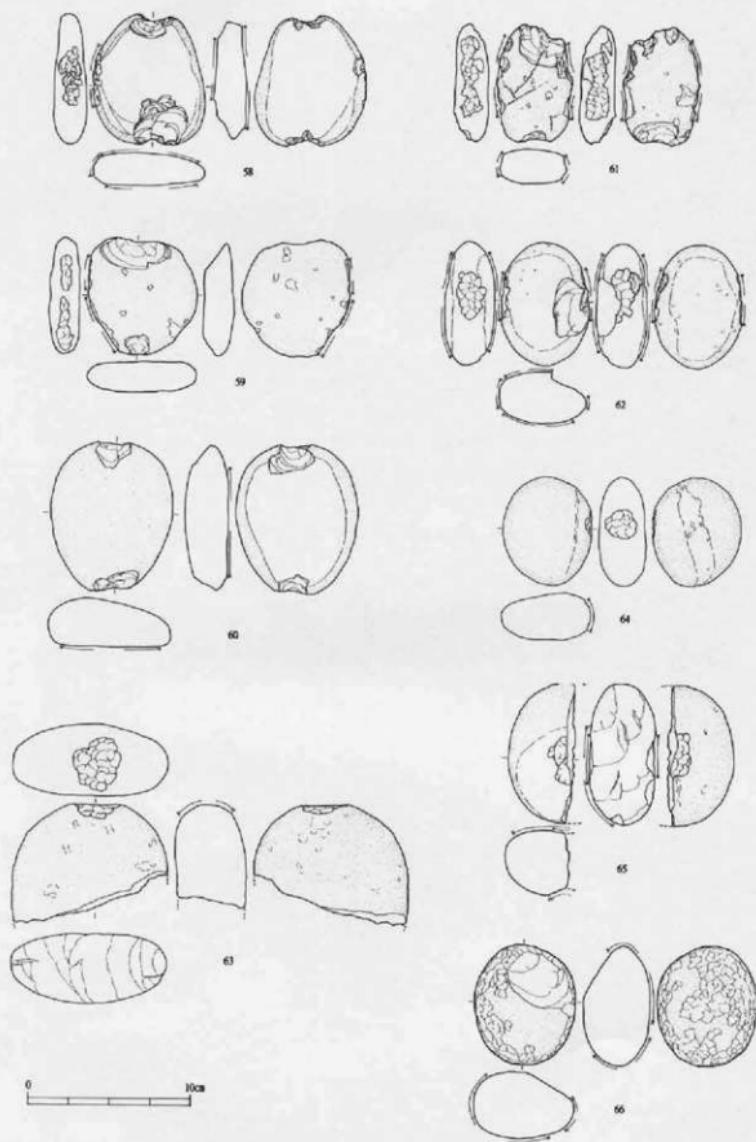
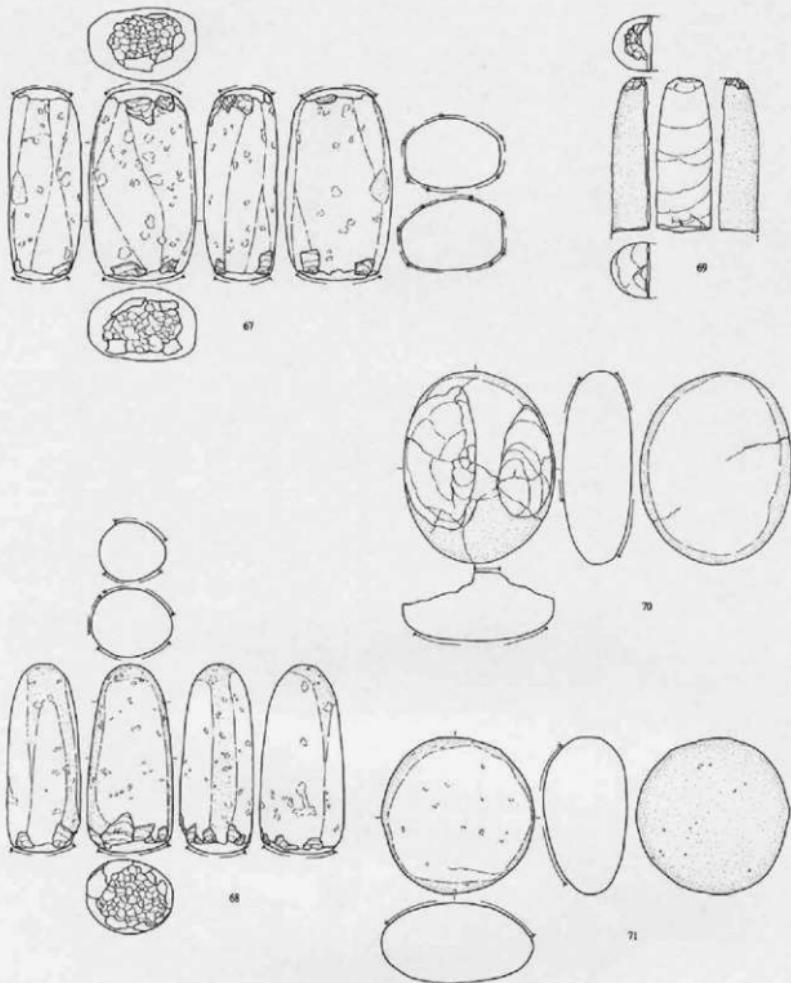
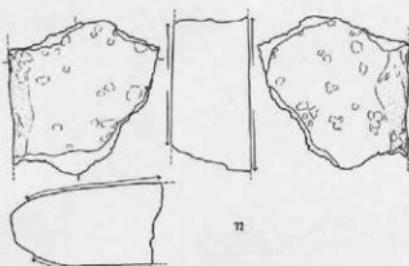


圖17 石錘・磨石類 ($S=1/3$)

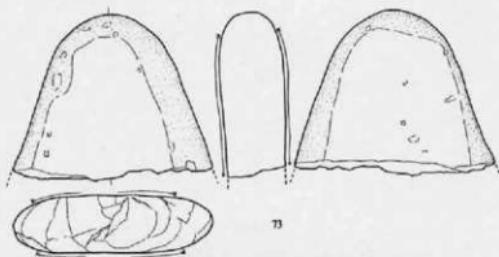


0 10cm

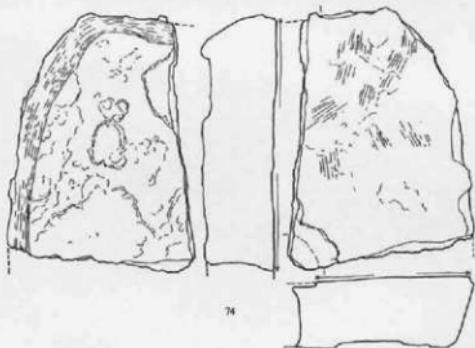
圖18 磨石頭 ($S = 1/3$)



n



n



n



圖19 石皿・磁石 (S=1/3)

番号	X	Y	直 横	器種	長	幅	厚	重 量	石 材	備 考
1	09	10	石鉗		3.4	8.0	1.0	22.2	輝石安山岩	
2	05	07	SP002	磨製石斧		5.0	2.7	10.5	灰斑石	
3	06	10	石鎌		2.11	1.37	0.21	0.67	花崗岩	
4	01	05	石鎌		12.6	10.2	4.2	251.7	花崗岩	
5	02	04	石鎌		10.8	9.6	3.4	467.7	花崗岩	
6	06	08	石鎌		10.6	8.8	3.6	436.5	花崗岩	
7	07	09	石鎌		9.8	7.3	2.6	238.9	花崗岩	被熱
8	02	06	SP007	石鎌	10.0	6.0	1.5	112.6	砂岩	
9	08	06	石鎌		9.6	6.7	2.3	197.7	花崗岩	被熱
10	02	05	SB01	石鎌	9.3	7.1	2.6	240.2	花崗岩	
11	06	09	石鎌		9.0	6.5	2.9	246.1	花崗岩	
12	05	07	SK19	石鎌	9.0	8.6	2.6	222.6	花崗岩	
13	06	09	SP003	石鎌	8.7	8.8	3.2	229.1	花崗岩	
14	06	08	石鎌		8.3	6.6	2.7	198.4	花崗岩	被熱
15	06	08	SP076	石鎌	8.3	6.5	2.2	136.6	砂岩	
16	03	06	SB02	石鎌	8.2	5.7	1.6	77.9	花崗岩	
17	09	10	石鎌		8.1	6.0	2.4	141.2	安山岩	
18	08	09	石鎌		8.1	5.8	2.2	128.9	花崗岩	被熱
19	09	10	石鎌		8.1	6.4	3.0	205.5	花崗岩	
20	08	09	SP111	石鎌	8.0	4.8	1.8	195.6	花崗岩	
21	06	09	SP097	石鎌	7.8	6.9	2.0	157.4	花崗岩	
22	01	05	石鎌		7.6	6.0	2.0	105.5	花崗岩	
23	09	10	石鎌		7.4	5.4	1.9	107.1	花崗岩	
24	07	09	石鎌		7.2	5.9	2.0	99.8	花崗岩	
25	08	09	SK12	石鎌	7.2	5.7	2.5	111.3	花崗岩	
26	08	10	石鎌		7.0	6.5	2.6	127.0	花崗岩	
27	07	09	石鎌		6.9	6.6	1.7	103.7	花崗岩	
28	07	09	石鎌		6.8	5.5	3.1	159.6	花崗岩	
29	04	06	SK02	石鎌	6.8	5.2	2.2	131.6	花崗岩	
30	07	09	石鎌		6.7	6.2	2.7	150.9	花崗岩	
31	04	07	石鎌		6.6	4.9	2.2	82.4	石英斑岩	
32	09	09	石鎌		6.6	5.8	1.3	71.9	花崗角礫岩	
33	04	06	石鎌		6.6	5.2	2.1	96.4	花崗岩	
34	04	06	石鎌		6.5	5.2	2.6	105.0	花崗角礫岩	
35	06	08	石鎌		6.4	5.9	1.8	94.5	砂岩	
36	05	08	石鎌		6.4	5.5	1.6	62.1	安山岩	被熱
37	09	09	SK12	石鎌	6.4	5.8	2.1	99.0	花崗岩	磨石に転用
38	04	07	石鎌		6.3	5.2	2.2	84.0	花崗岩	被熱
39	08	09	石鎌		6.3	4.8	1.6	46.4	花崗角礫岩	
40	08	09	SP097	石鎌	6.2	7.0	1.8	114.1	花崗岩	
41	01	05	石鎌		6.0	5.0	1.8	73.9	石英斑岩	
42	08	09	石鎌		6.0	4.9	2.0	27.0	砂岩	
43	08	09	石鎌		6.0	4.7	1.7	62.7	花崗角礫岩	
44	03	06	SB02	石鎌	6.0	5.2	1.5	61.7	花崗岩	
45	08	10	石鎌		5.9	5.3	2.6	111.3	花崗角礫岩	
46	09	10	石鎌		5.9	5.4	2.4	110.0	花崗角礫岩	
47	04	07	石鎌		5.9	3.8	1.9	54.5	花崗角礫岩	
48	03	06	SB02	石鎌	5.8	5.5	2.2	106.3	石英斑岩	
49	04	07	SP049	石鎌	5.8	4.4	2.2	99.8	石英斑岩	
50	08	09	石鎌		5.6	5.0	1.4	52.2	花崗斑岩	
51	04	07	石鎌		5.4	4.1	1.5	45.6	花崗岩	
52	08	09	石鎌		5.4	5.7	1.9	73.7	石英斑岩	
53	04	07	石鎌		5.3	5.0	2.1	76.6	花崗斑岩	
54	03	06	SB02	石鎌	5.3	4.9	2.0	61.2	花崗斑岩	
55	07	09	石鎌		4.8	4.7	1.4	35.7	花崗角礫岩	被熱
56	09	09	SK22	石鎌	4.7	4.4	1.5	34.2	花崗斑岩	
57	05	07	SK19	石鎌			1.1	28.0	花崗岩	
58	06	09	石鎌		8.0	6.9	2.1	164.9	砂岩	磨石に転用
59	02	05	SB01	石鎌	7.2	6.7	1.9	128.5	花崗斑岩	磨石に転用
60	02	05	SP131	石鎌	9.2	7.5	3.0	283.4	花崗斑岩	磨石に転用
61	08	09	SP111	石鎌	7.2	4.7	2.2	98.4	花崗斑岩	磨石に転用
62	07	08	SK04	磨石頭	7.6	5.4	3.2	150.2	花崗岩	
63	04	06	磨石頭		9.6	4.4	3.9	392.8	花崗角礫岩	被熱
64	04	07	磨石頭		6.7	3.5	2.9	147.3	花崗岩	
65	04	07	磨石頭		8.7	4.0	1.6	136.6	花崗岩	
66	02	05	SP131	磨石頭	7.4	6.2	4.1	240.8	花崗岩	
67			磨石頭		11.6	6.6	4.5	527.1	花崗角礫岩	被熱
68	01	04	磨石頭		11.5	5.3	4.5	371.2	花崗岩	
69	08	09	磨石頭			3.4	123.0	花崗岩		
70	07	09	磨石頭		11.7	9.3	4.0	477.9	花崗岩	被熱
71	05	07	磨石頭		9.6	9.4	5.1	599.8	石英斑岩	
72	04	06	石鎌			3.0	591.8	石英斑岩		
73	08	09	武石			4.0	613.5	花崗角礫岩		
74	09	09	SP160	武石			4.7	970.7	石英斑岩	

表2 石器計測表

※長・幅・厚の計測値の単位はcm、重量の計測値の単位はg。

番号	長	幅	厚	重量	石 材
2	13.2	8.3	3.4	574.4	花崗斑岩
3	9.1	6.7	2.8	249.8	花崗斑岩
4	0.1	7.8	3.3	535.2	耀石
5	13.6	8.0	3.3	513.2	花崗斑岩
6	12.8	10	2.6	502.7	花崗斑岩
7	10.6	8.7	2.6	323.8	花崗斑岩
8	14.9	10.1	4.8	885.3	花崗斑岩
9	11.6	8.4	4.5	505.0	花崗斑岩
10	12.1	8.8	4.1	507.4	花崗斑岩
11	11.6	10.4	4.2	724.1	花崗斑岩
12	12.2	8.3	3.7	517.8	花崗斑岩
13	14.1	9.7	3.7	631.8	花崗斑岩
14	11.1	8.3	3.1	370.6	花崗斑岩
15	10.6	8.9	4.0	542.7	花崗斑岩
16	9.8	8.9	3.2	393.7	花崗斑岩
17	12.9	8.8	3.6	499.9	花崗斑岩
18	11.8	9.1	3.6	467.6	耀石
19	10.4	6.9	2.3	281.1	花崗斑岩
20	10.5	8.0	3.0	338.2	耀石
21	11.9	8.2	3.6	502.6	花崗斑岩
22	11.0	8.2	3.6	505.4	花崗斑岩
23	10.4	8.2	3.7	409.9	花崗斑岩
24	11.8	9.1	3.8	502.1	花崗斑岩
25	12.9	8.7	3.6	455.3	花崗斑岩
26	11.5	8.5	2.6	311.9	花崗斑岩
27	11.2	9.0	4.1	476.9	花崗斑岩
28	12.4	6.4	3.4	415.6	花崗斑岩
29	11.7	9.8	3.2	927.6	花崗斑岩
30	11.8	8.0	3.5	466.8	花崗斑岩
31	10.4	7.4	3.5	390.7	花崗斑岩
32	12.2	9.9	3.7	502.0	花崗斑岩
33	11.3	8.7	3.3	453.5	花崗斑岩
34	10.8	9.3	2.2	290.7	花崗斑岩
35	11.7	10.1	2.8	430.7	花崗斑岩
36	12.5	9.8	3.9	555.7	花崗斑岩
37	11.1	9.1	3.3	429.2	花崗斑岩
38	12.5	7.4	4.7	651.1	花崗斑岩
39	11.7	10.0	3.2	523.9	花崗斑岩
40	10.4	8.2	3.4	424.2	花崗斑岩
41	10.9	8.3	3.6	422.1	石英斑岩
42	13.2	8.6	3.5	574.6	花崗斑岩
43	14.8	8.6	3.9	628.8	花崗斑岩
44	9.6	7.8	2.2	215.0	花崗斑岩
45	13.5	8.9	3.8	611.7	花崗斑岩
46	10.8	9.6	4.0	476.0	花崗斑岩
47	11.4	7.9	3.3	404.3	花崗斑岩
48	11.8	10.0	3.3	509.7	花崗斑岩
49	8.2	8.2	2.5	270.9	花崗斑岩
50	10.8	8.7	3.9	477.9	花崗斑岩
51	13.9	10.8	4.3	795.6	流紋岩
52	18.2	7.0	2.9	284.1	花崗斑岩
53	14.4	10.5	3.0	548.8	花崗斑岩
54	11.1	8.4	3.4	399.6	花崗斑岩
55	13.1	7.4	2.6	375.4	花崗斑岩
56	12.3	9.0	4.3	434.3	花崗斑岩
57	10.4	8.8	3.3	404.3	花崗斑岩
58	11.8	9.0	2.5	369.9	流紋岩
59	8.7	5.4	1.8	91.8	花崗斑岩
60	12.9	10.1	4.2	691.1	花崗斑岩
61	12.2	8.4	3.9	540.9	花崗斑岩
62	10.5	8.3	2.9	316.4	花崗斑岩
63	12.9	8.2	2.7	345.7	花崗斑岩
64	11.1	9.7	3.4	571.1	花崗斑岩
65	14.2	8.4	4.3	697.7	花崗斑岩
66	10.4	9.0	2.3	269.9	流紋岩
67	11.5	8.4	3.8	477.1	花崗斑岩
68	12.9	10.1	4.2	522.9	花崗斑岩
69	12.8	8.6	3.6	553.5	花崗斑岩
70	12.2	8.4	3.3	480.9	花崗斑岩
71	10.5	8.3	2.9	316.4	花崗斑岩
72	13.5	8.4	3.4	547.5	花崗斑岩
73	11.4	9.0	4.1	571.1	花崗斑岩
74	11.9	9.7	2.9	459.6	花崗斑岩
75	10.4	7.9	2.3	323.2	花崗斑岩
76	11.4	8.7	3.6	477.9	花崗斑岩
77	10.4	7.9	2.3	323.2	花崗斑岩
78	12.4	8.6	3.6	553.5	花崗斑岩
79	12.2	8.4	3.3	480.9	花崗斑岩
80	12.7	8.0	3.3	543.5	花崗斑岩
81	12.0	8.9	3.1	404.5	花崗斑岩
82	11.5	8.9	3.0	414.7	花崗斑岩
83	10.5	10.2	3.9	503.8	花崗斑岩
84	12.8	10.4	3.9	675.5	花崗斑岩
85	10.5	10.1	4.4	542.6	花崗斑岩
86	12.8	10.4	3.9	675.5	花崗斑岩
87	11.9	8.1	2.4	322.0	花崗斑岩
88	11.4	7.9	4.5	467.0	花崗斑岩

表3 集石遺構出土標記調査表

(番号は、取り上げ番号)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

SK01 (図7)

X01Y04グリッド、工事立ち会い中のトレンチ内で検出。大小の被熱礫が入った土坑であり、このうち最大のものは、赤色の顔料が分厚く付着していた。顔料加工に関連する施設の可能性がある。この土坑の傍らで弥生後期のものと思われる甕の破片が出土したので、この年代に位置づくと考えた。赤彩を施す祭式土器が盛行する時期とも符合するので、その蓋然性は高いと考える。

土器 (図29の34)

図示したのは、SI02の覆土中から出土した甕の底部である。形態から、弥生後期のものと思われる。

第3節 古代の遺構と遺物

1. 遺構

SB01 (図20)

梁行2間×桁行3間、柱間は梁行で160cm、桁行で240~260cmである。

SB02 (図20)

梁行2間、桁行は不明だが、後述するSB09に類似する柱穴の配置であることから、梁行2間×桁行2間と推定される。柱間は梁行で240~280cm、桁行で200~320cmである。

SB03 (図21)

梁行・桁行とも規模は不明である。柱間は160~200cmである。

SB04 (図21)

梁行・桁行とも規模は不明だが、梁行2間×桁行3間程度となろう。柱間は梁行で200cm、桁行で240cmである。

SB05 (図22)

梁行不明、桁行3間だが、梁行2間×桁行3間程度となろう。柱間は梁行で160cm、桁行で240~260cmである。

SB06 (図22)

梁行2間、桁行は不明である。柱間は梁行で240~280cm、桁行で240cm程度である。

SB07 (図23)

梁行2間、桁行は不明である。柱間は梁行で120cm、桁行で100cm程度である。

SB08 (図23)

梁行2間、桁行は不明である。柱間は梁行・桁行とも200cmである。

SB09 (図23)

梁行2間×桁行2間、柱間は梁行で240~260cm、桁行で240~360cmである。

SI01 (図23)

竪穴のプランは隅丸方形を基調とする形態だが、北西隅にせり出しを持つ歪なものである。柱穴や竈などは確認されず、規模も小さい。

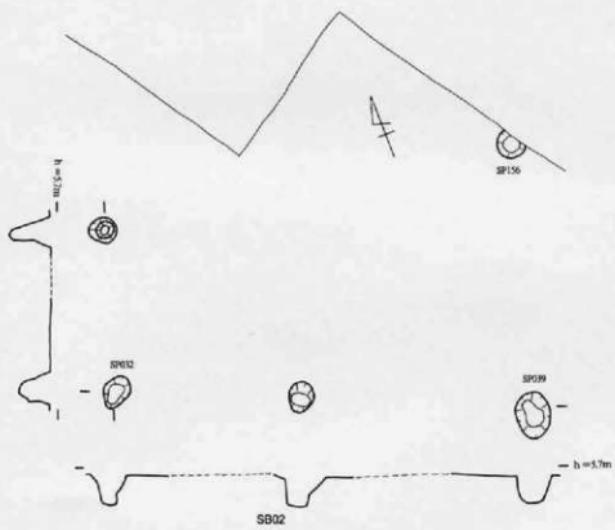
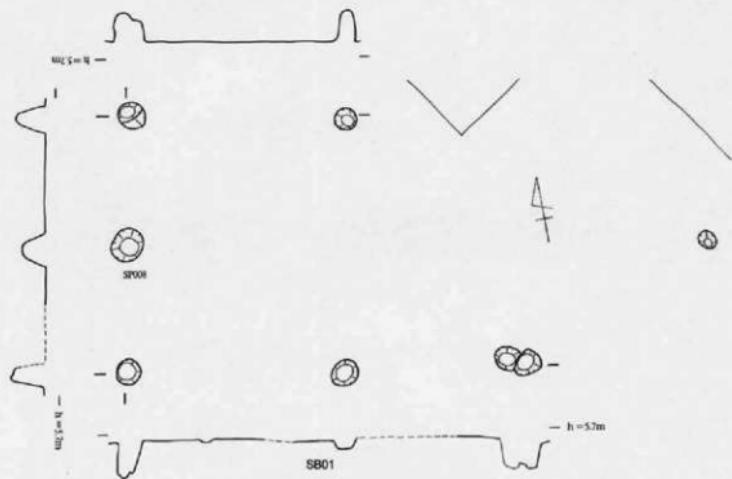


図20 古代の掘立柱建物 ($S = 1/60$)

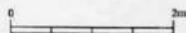
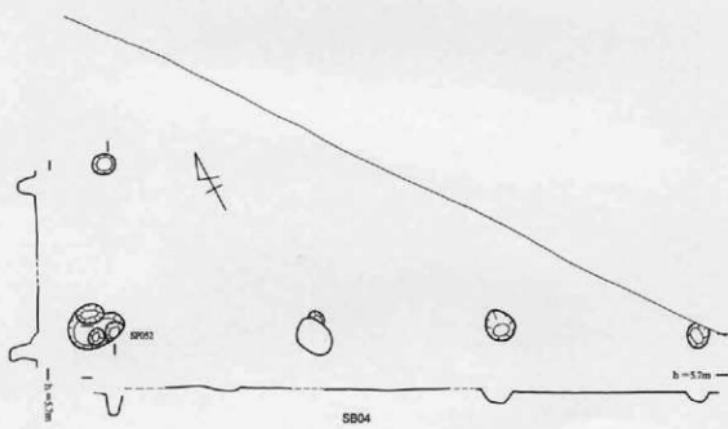
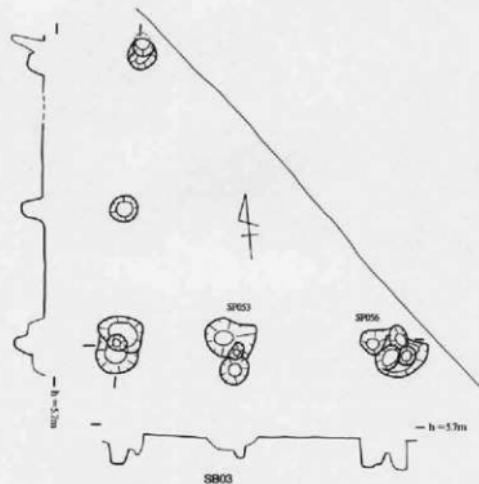


図21 古代の据立柱建物 (S = 1/60)

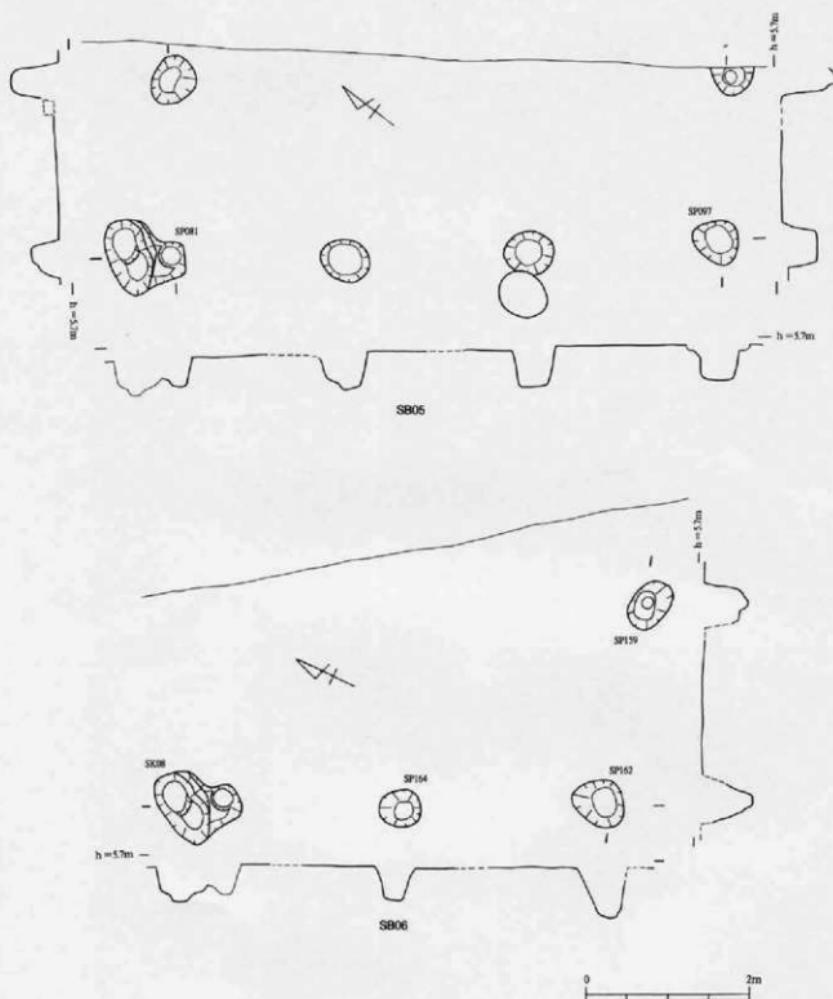


図22 古代の据立柱建物 (S = 1/60)

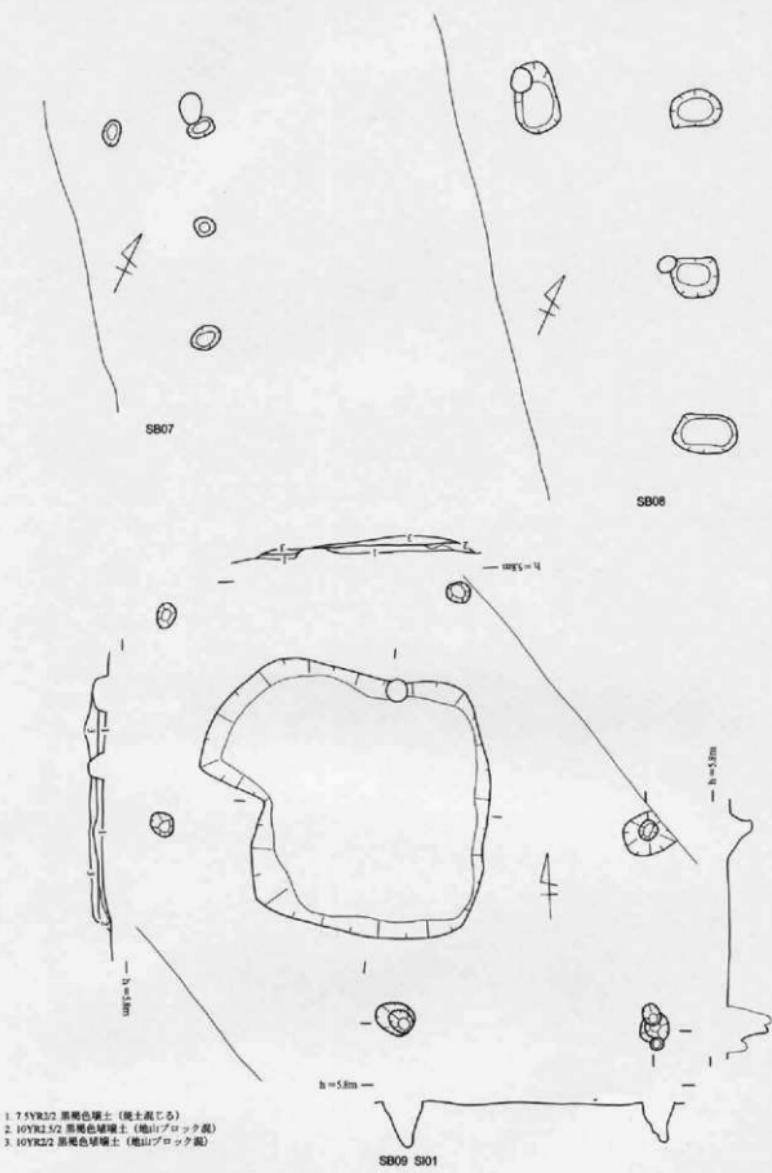


図23 古代の圓柱建物等 (S=1/60)

0 2m

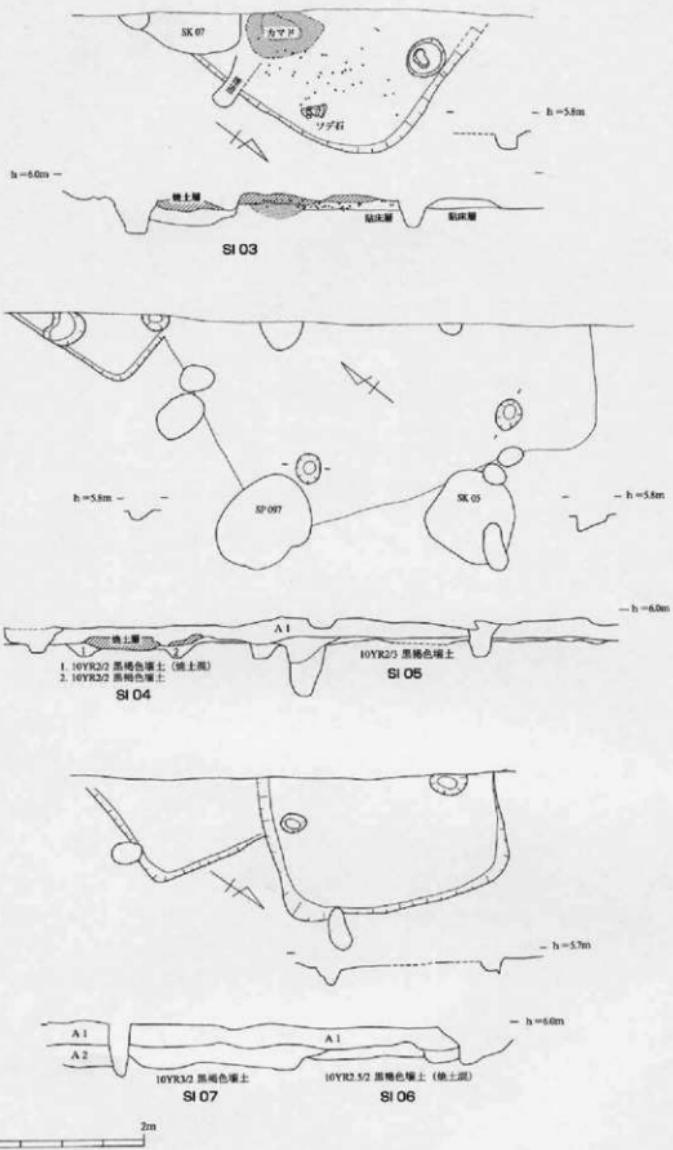
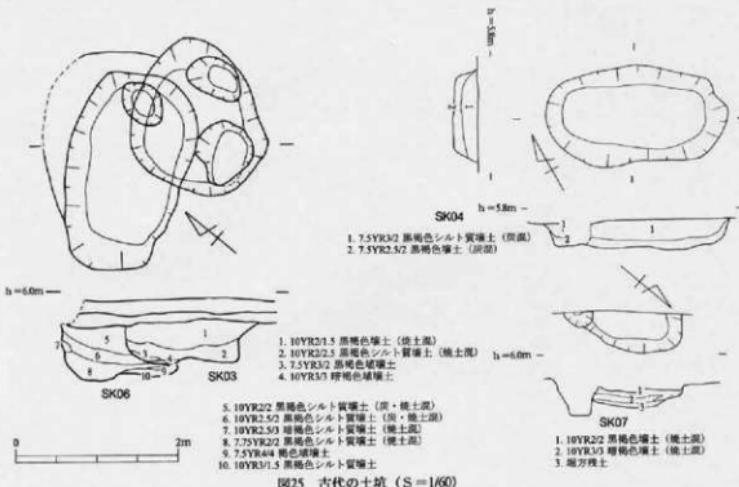


図24 古代の竪穴建物 (S=1/60)



S I 0 3 (図24)

堅穴のプランは隅丸方形であり、規模は不明だが、竪の位置から推定して、幅4 m程度であろう。廃絶後に削平を受けている。図上にプロットした遺物の出土地点は、一部に削平層のものを含むが、過半のものは貼床層出土である。

S I 0 4 (図24)

堅穴のプランは隅丸方形であり、規模は不明である。廃絶後に削平を受けており、竪のものと思われる焼土層に覆われていた。

S I 0 5 (図24)

堅穴のプランは隅丸方形であり、幅5 m程度の規模である。廃絶後に削平を受けている。

S I 0 6 (図24)

堅穴のプランは隅丸方形であり、幅3 m程度の規模である。柱穴の位置から、二本主柱と思われる。

S I 0 7 (図24)

堅穴のプランは隅丸方形であり、規模は不明だが、S I 0 6 と同程度と思われる。

S K 0 3 (図25)

S K 0 6 を切る土坑。8世紀代の須恵器などが出土している。

S K 0 4 (図25)

S I 0 3 の傍に検出した土坑であり、轔の羽口が出土し、付近には鉄滓も出土している。

S K 0 6 (図25)

S B 0 1・S B 0 2 の廃絶後に掘り込まれた土坑である。

S K 0 7 (図25)

S I 0 3 の廃絶後に掘り込まれた土坑である。



図26 須恵器 (S=1/3)

0 10cm

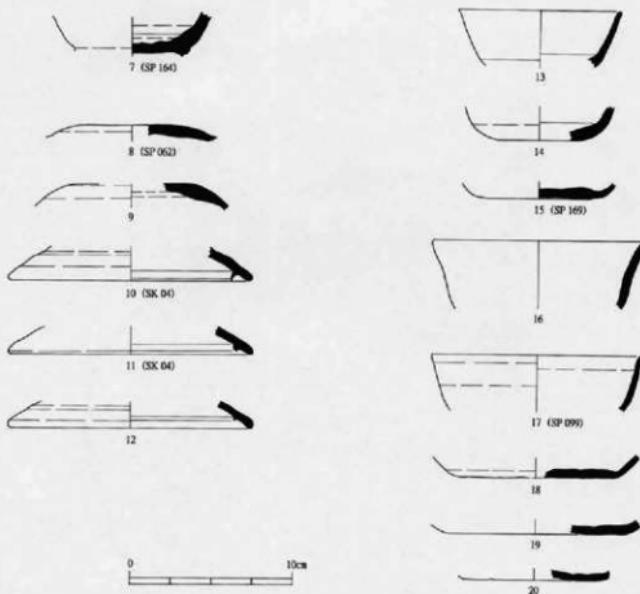


図27 須恵器 ($S=1/3$)

2. 遺物

須恵器 (図26の1～図27の20)

甌 (1～4) 2・3は同一個体である。口縁部は外傾して立ち上がり、1・2は端部で内済し、4は、端部を外につまみ出す。4は波状文を施す。

甌 (5・6) 上半部の破片であり、ほぼ円筒形に近い形態である。口縁端部は外に肥厚し、把手は肉厚で、焼成時の破損防止のための切り込みが貫通している。

壺 (7) 高台の付く壺の底部片である。

壺环 (8～20) 壺は返しの付くタイプのもので、身は全て無台である。13は内面に塗膜状の付着物があった。

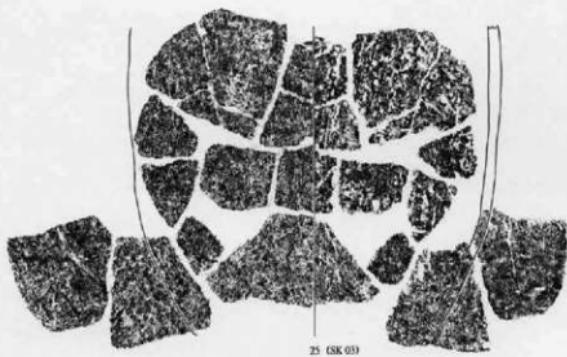
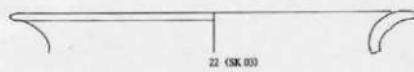
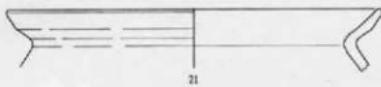
14は椀器形であり、蓋の伴わないとされるタイプである。

土師器 (図28の21～図29の38)

甌 (21～33) 21は頸部の括れが鋭く、口縁部は内済して立ち上がる。22～25は長胴甌であり、内外面は刷毛調整される。29～32も同様の長胴甌であるが内面は削り調整される。26～28は小型甌であり、これも内面は削り調整である。33は口縁端部で屈曲し、内外面は撫で調整である。

甌 (35) 底部の破片である。

椀 (36～38) 37は高台の付く椀である。38は底部に糸切り痕を残す。37・38の網フセ部分は内黒処理された部分である。



0 100

圖28 土師器 (S = 1/3)

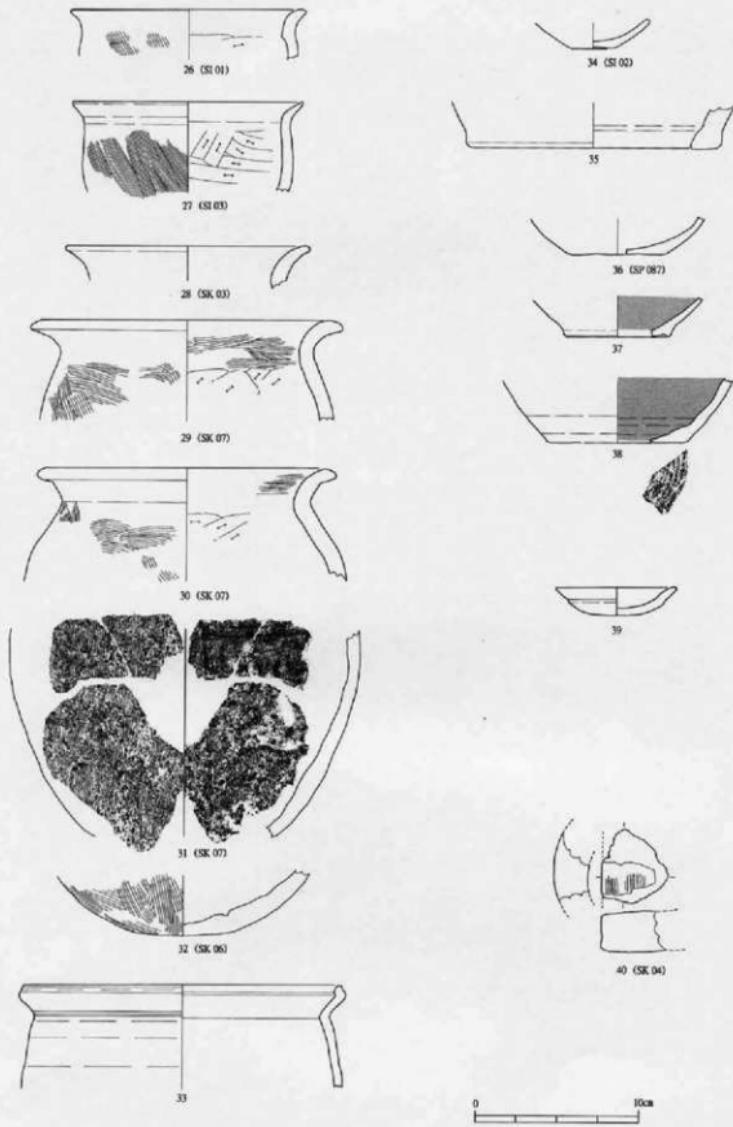


図29 土師器等 (S = 1/3)

その他（図29の40）
輪の羽口の破片である。

第4節 中世の遺物

土師皿（図29の39）X 0 3 Y 0 6 グリッドより出土した。15世紀に比定される。当遺跡が御幸塚城の外堀の内側に位置し、文献上の築城の年代とも符合することから、これに連関するものか。

第4章 まとめ

第1節 縄文時代

縄文時代の造構は、風倒木や古代の造構などの影響により遺存状態が悪かったこともあり、不明な部分が多いが、出土遺物からは、草創期、前期前～中葉、中期前葉、後期中葉、晚期前葉の五つの時期がある。

当遺跡で最も多く出土したのは石錘だが、これは時期の判明する出土状況を示す資料を含まない。しかし、ここで敢えて時期の特定を試みよう。

まず出土した石錘の分布状況を見ると、X 0 8 Y 0 9 グリッドが16個と最も多く、S I 0 2 の周辺もやや多くなる傾向がある。集石造構もS I 0 2 に隣接するが、石錘とは連関しない可能性が高いことはすでに述べた。ここで若干補足すると、集石造構の礫の殆どは花崗斑岩であり、これらは硬い岩質なのに対し、石錘は凝灰岩や凝灰角砾岩といった軟らかい岩質が好まれる傾向がある。また、石錘にはしばしば砂岩質の礫が使われるのに対し、集石造構には砂岩質の礫は含まれない。それ以上に、集石造構の礫は、同じ岩質の礫を集める傾向がきわめて強い。石錘に使用される礫の岩質にはばらつきがある点と、石錘に好んで使用されるサイズの礫が集石造構には殆ど認められない点も勘案すると、石錘と集石造構の礫との連関性はないと考える。当遺跡で出土する敲打器も軟らかい岩質の素材が使われることから、集石造構の礫を加工するのには向かない。したがって、全てとは言えないまでも、石錘の多くは中期に帰属すると考える。

中期の造構として挙げられるのはS I 0 2 だが、これは、堅穴のプランの規模が小さく、継続的な生活には向きである。柱穴なども検出されず、上屋は簡便な構造であったと思われる。S I 0 2 は、後期の段階では廃棄土坑として利用されていた。

集石造構は、礫の隙間から出土した土器片から、後期に帰属することは確実で、デボのような性格のものを想定したい。しかしながら、これらの礫を素材とする石器は、石錘の一部と磨石などに認められるものの、礫の形状からは、少なくとも磨石への使用を意図しているとは考えにくい。かといって他に使用例を検出したわけでもなく、何を意図してこれらの礫をかためておいたかは不明である。

隣接する遺跡にも言及すると、北側に隣接する五郎座貝塚は、探査された遺物を見る限り、当遺跡と似た石器組成を持つ。中期の土器は当遺跡と時期が重なるようだが、後期の土器に関しては不明である。また、第1章でも述べたが、五郎座貝塚から石棒・石剣といった呪具の出土があることから、継続的に生活の拠点として機能していた可能性が高く、これに比べて遺跡の規模が小さく、石器組成が石錘に極端に偏ることを勘案すると、石錘に象徴される生業活動すなわち内湾性漁業に従事するための一時的な拠点として機能したと考えたい。後期の段階でも、当遺跡の位置づけは中期の場合と本

質的には同様なものを考えてよいと思われるが、後期の方が利用形態がやや異なるものを想定してもよいだろう。なお、当遺跡の南側に隣接する土百遺跡で出土した土器は中期後半に帰属するものであり、当遺跡や五郎座貝塚とは、時期がずれる。

第2節 古代

古代の遺物は、概ね7世紀前半から9世紀にかけての時期に比定される資料が出土した。出土量や出土状態から見れば、主体は7世紀前半に置くことができるが、8世紀前半頃に帰属すると思われる土師器片も、比較的目立つ。8世紀後半から9世紀の遺物は、今調査区内では稀薄であった。

遺構は、遺存状態が悪いために個々の年代を明確にはできないが、比較的年代を特定できるものを以下に列挙すると、SI03は、これを削平したあとに掘り込まれたSK07より出土した土器から、7世紀前半ごろ、SK03は下底より出土した須恵器甕により8世紀前半、SK07はSI03上面の削平層の土器から8世紀前半、SK06は、SK03に切られることから、少なくとも8世紀前半を下らない時期にそれぞれ比定される。SB01・SB02も、SK06に切られることから、同様に8世紀前半を下らない時期に比定される。SB02とSB09は、建物の規模や柱穴の配置など、共通点多いので同じ目的で建てられたものであろう。SI04・SI05・SB05・SB06は、それぞれ重複することから同一時期とは考えられず、SI03も、位置的に近すぎることから、少なくともSB05・SB06と同一の時期とは考えられない。SI06・SI07は、やはり重複するので同一時期ではあり得ず、規模も似通っていることから同じ目的で建てられたものであろう。また、SI06の柱穴の位置から二本主柱の小型の堅穴建物と思われる。

これらを総括すると、SB02・SB09、SB05・SB06は、大きな荷重に耐えられる構造が推定されることから倉庫の類、SB08も同様の建物が考えられる。SB03・SB05は、付近に鉄滓（写真図版9）や輪の羽口などの出土があることから、鍛冶関連の施設の可能性がある。

遺構の年代を出土遺物から明確にすることはできないながらも、概ね、7世紀前半から8世紀前半に至る年代のものが中心となるだろうが、今調査区内に於いては主体を7世紀代に求めることができ。また、8世紀後半から9世紀に比定される土器片はがSB05・SB06の周辺で出土することと、他の建物と構造的に異なることが推定されることから、少なくともこの二つの掘立柱建物は年代を下げて考えた方がよいかもしれない。ここでは、8世紀後半から9世紀にかけての年代に比定される可能性を留保しておくにとどめよう。



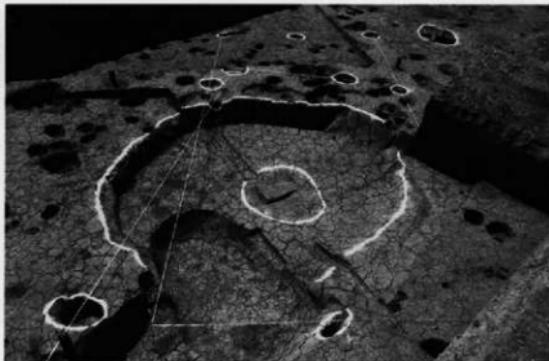
表土除去作業



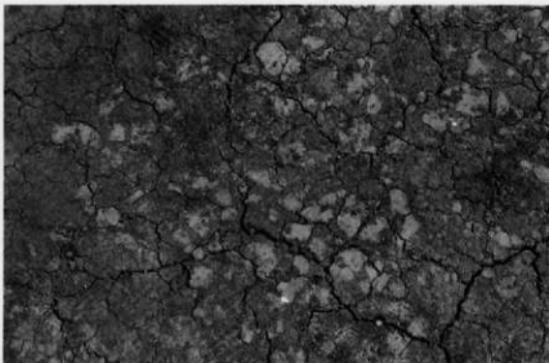
表土除去直後の集石堆積



土層観察作業



S102



S102 床面



集石遺構



SK19



SK22



SK01



SB01 · SB02



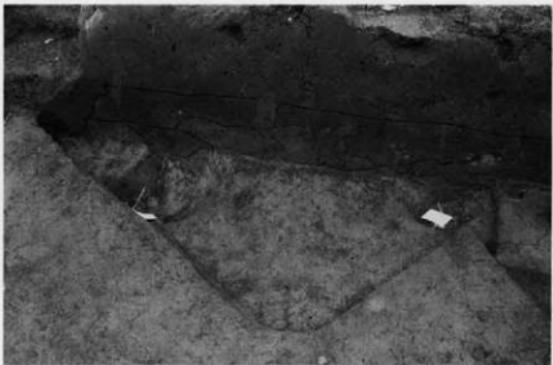
SB03 · SB04



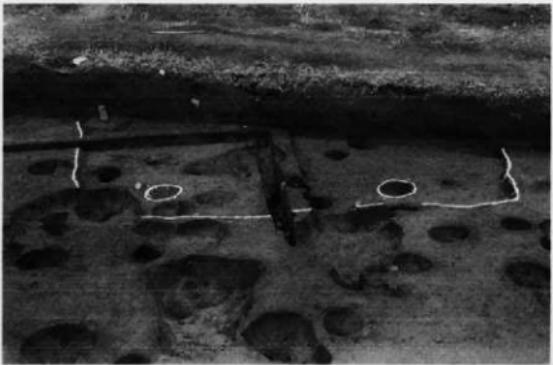
SB05 · SB06



SI03



SI04



SI05



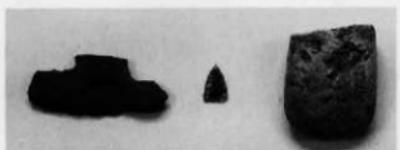
SK03



SK04

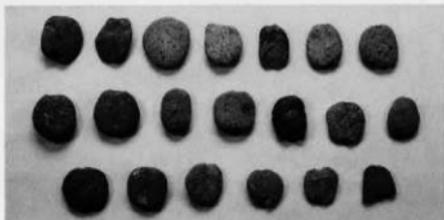


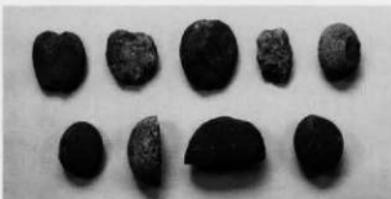
SK07



石匙
石鑿
磨製石斧

石鍤

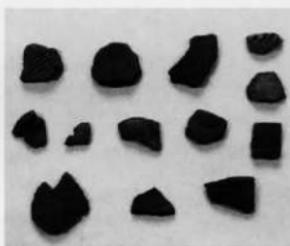
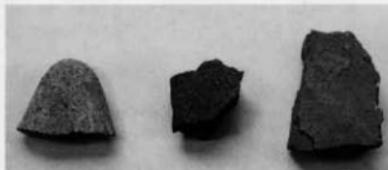




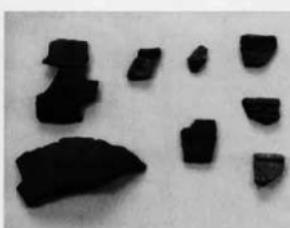
磨石類



砥石
石盤



純文土器





壺坏

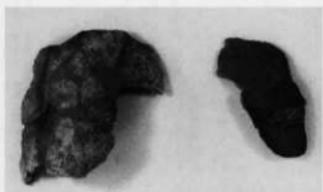
須恵器



瓶



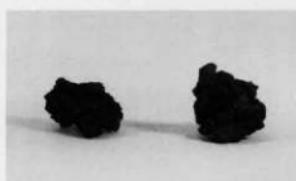
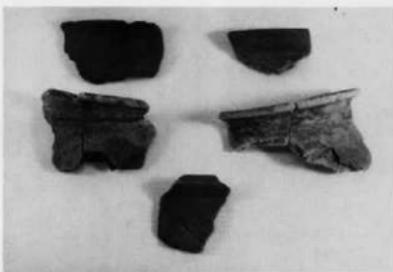
壺



壺（胴部）

土師器

壺（口縁部）



鉄滓



壺



土師皿

報告書抄録

ふりがな	いまえごちょうめいせき						
書名	今江五丁目遺跡						
副書名	宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	宮田 明						
編集機関	小松市教育委員会						
所在地	〒923-0904 石川県小松市小馬出町91番地						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いまえごちょうめい 今江五丁目	いまえごんこまつし 石川県小松市 いまえごんこまつし 今江町五丁目 787番地外	17203		36度 22分 33秒	136度 26分 26秒	1999/06/23 ~1999/08/09	340m ² 宅地造成工事
所収遺跡名	集落跡	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
今江五丁目	集落跡	縄文	堅穴建物 1 土坑 3 集石遺構 1	縄文土器 礫石錘、磨石類			
	集落跡	奈良	掘立柱建物 9 堅穴建物 7 土坑 4	須恵器、土師器 鐵滓			

今江五丁目遺跡

－宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成12年3月20日 印刷

平成12年3月31日 発行

編集・発行 志乃丘商事株式会社

石川県小松市桜木町133-1 TEL.0761-21-8888

石川県小松市教育委員会

石川県小松市小堀出町91 TEL.0761-22-4111

印 刷 アイワ印刷株式会社

石川県小松市旭町21 TEL.0761-22-8613
